

MONOGRAPH
OF
PLANT-DYEING PECULIAR TO JAPAN



RAR

746.13

YAM

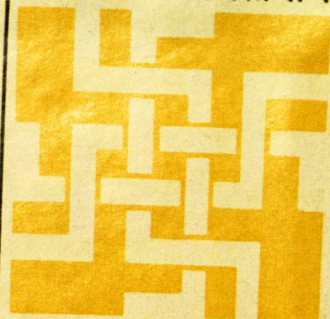
12/84
11 \neq (KH.III) + 15 %

F45/24
3440

CBF 93

R/86/Text/120c/11





KALANIDHI COLLECTION

INDIRA GANDHI NATIONAL CENTRE FOR THE ARTS

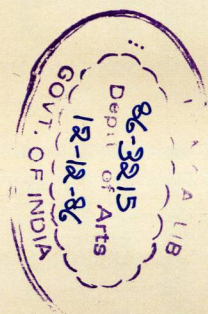
67.11. Yamaze Ki Akira : Monograph of Plant - Dyeing peculiar to Japan
(Nippon Kusekizome - fu) Pp. 78 : This is a limited edition within
1000 No : 65 photographic & illustrations ; wood block print ;
Japan : 1961. 3000.00

679



日本草木染譜

山崎 斌著



序のことば

この書は、過去の植物性染色の口碑と、その文献と、今日の植物学的解明と染色実験を併せた集成で、謂って見れば、現在に貽された「日本草木染」の姿態そのものであります。

昭和当初のことであり、私は当時の農村不況の中に、農民の実生活を豊かにしたく、一助として田園手織物の復活に思ひつき、尚その染色には古来の、植物を利用した手法を回復しようとしたのであります。

ところが、この染色手法は、明治三十年代の所謂染色革命に遭遇して、既に亡失の彼方にあり、一切化学染料によるものに交替、その以前の日本手法に冠すべく名がさへも無かったのであります。

かくて、私に「草木染」(くさきぞめ)——の仮称を与へてこれの復興に従事し、その結果を集成、昭和八年(一九三三)夏日、この書の前身なる「日本固有植物染色譜」を、先づ刊行したのであります。

顧みれば、これの復活には異常の困苦がありました。明治後期のこれが衰退に伴ふ口碑の喪失、また文献の散佚、従って染材の収用さへもが困難を極め、もし染用資材が、一方皇漢医薬料として需要されるものでなかったならば(これにも甚しく衰亡の徴があったのですが)既に志をその当初に於て放棄しなければならなかったらう程でありました。

爾後三十余年を通じ、一意これの保存再興に尽心、時に切りにこ

の書の再出版をも慫慂されたのでありますが、当時戦前、戦中戦後にあたり、——絶版二十八年を経過して、漸く今日に遇ひ、茲に増補改訂を遂げて、この出版を完了したものであります。

まことに、染色に於ても、当に万草に試みて一草を挙げ知らせ、遂に曾ての日の壮大を成した祖先の精進は、この一路に於ても恒に驚異でさへありました。

遠く中亜、盛唐の影響をも受け、飛鳥・奈良朝に爛熟し、累次発達をとげたこの染法による——「日本の染色」も、時には衰亡にも頻しましたが、今後に於て、却って海外の嘆美にも照らされるかに在るやうであります。

尚、思ひ出を言へば師、島崎藤村は、前著の刊行に際し、序文して「わたしたちの祖先が手工芸のいとなみは君によって今の代に活きかへるいとぐちを得た。」と、「これは土と水と草の香で一ぱいだ。おそろく後の代の人もこの愛すべき書物から得るところは多からうと思ふ。」と言ってくれました。

今日、「草木染百色鑑」「草木染手織抄」の二部を既刊し、こゝに本書をも完成、当に三部作を刊行し了ったことには感慨一層のものがあります。深き感謝であり、まことに「生く日の、足る日」のおもひであります。

山 崎

斌

炉辺版

限定壹千部之

第

号

月明会出版部 印行

神奈川・柿生・月明会



Indira Gandhi National
Centre for the Arts

あ
る

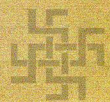


藍 草 図

江 戸 版 画

Ai no Zu (Indigo-plant)

Wood block Print by EDO-KANOO





紅 花 摘 図

原 色 写 真 版

Benibana Tsumi no Zu

Picking The Petals of The "Benibana",

The materiol for dye.



あかね (茜草科)

Rudia Cordifolia L. Var. Mungista MIQ

「あかね」は、日本草木染に於て、赤色を染めたものゝ第一始発のもの、恐らく最初の染色料の一つであったものらしい。

この草の名も「あかね」とよばれた。その根は赤い色をしてゐるし、この根の煎汁によつて染色された赤の色相を、古来「赤根」と呼び來つたのである。

その染色の手法が極めて単純で、まことに原始的であり、或は染色に先行したかと想像される薬用としてのこの煎出液が、当時衣料の漂白に用ひた灰汁と、接触した様のことから、この赤色染料をも発見した事実があつたのではなかったか。或は更に、紫根の発見も、その灰汁による発色の操作もが、こゝに引出されて來たのではないか。言つて見ると、その植物名と、染色名とが同一であり、——あかねと赤根、むらさきと根紫、べにと紅花、黄膚ときはだいろの類は、まさに原始染色の原始性に出発した内容であるらしい。

「和名抄」には「阿加禰」とあり、また「あかねかづら」「べにかづら」の別名もある。多年生の蔓草なので、かづらとも呼ぶのであり、紅色の染料として「べに」ともいったのであらう。

草の姿は口絵として貼附されたてゐる標本にも見る様に、葉は卵

状心形の四箇輪生、茎は方形中空で、葉と共に細刺をもつてゐる。夏秋の交、葉腋に淡黄白色の聚繖花をつけ、後、黒色球状の山椒に似た小さい実をつけるのである。

染用されるのは、根の部分で、赤黄色の太い髯状をしてゐる。薬用は「茜根」（さいこん）とよび、強壯、利尿、又解熱に効がある。染料には、晩秋、枯葉を待つて、深く地中を探り、根部を収用、土をよく洗ひ、尚、水中に黄色の液汁を流失させ、乾燥して収蔵する。乾根は赤褐色をしてゐる。

染法は単純で、まづ、乾根を水洗ひし、黄色の液汁を十分に捨て、

＊あかねの茎葉



AKANE (Bengal - madder)

やゝ赤色となった根部を、鉄気のない煎用鍋で熱煎、この煎出液の中に被染物を浸染するのである。(染色の手法は六十六頁参照) 尚、発色にはこれは全く灰汁(あく)によるものだが、上代の「緋」に至るには、交染少くとも二十回を要したのである。

これは「日本紀二十五」(大化三年制)に「大小錦冠服用色用ニ眞緋」とあり、「衣服令」(奈良朝)には「緋ハ蘇枋ノ次、紅ノ上タリ」「延喜縫殿寮式」(九〇〇)には「深緋。綾一疋、茜大卅斤、紫草卅斤、米五升、灰三石、薪八百卅斤」とあり、また「浅緋。綾一疋、茜大卅斤、米五升、灰三石、薪三百六十斤」と用度されてゐる。

米 赤 根

これは「四季草」に「浅緋ノ色、俗ニ火トイフ色ナリ」とある色相だらう。

染例、第一は「あかね」単独のものゝ灰汁発色で、或はこの色相を深くしたものが上代の「真緋」(「書紀」の真緋の服)の色で、即ち「夕茜」(ゆふあかね)の色であらうか。

AKANE (Root)

しかも後代には、この「緋」は時代の風尚に追従してか、「べにばな」(十八頁参照)と「うこん」(三十六頁参照)とで染めた鮮かな赤

黄色と交替し、また「蘇枋」^{すはう}(十六頁参照)の明馨による赤緋の度を深くしたものにこれを譲り、尚、この草本の色料含有が少なく、また染色にも手数を要するところから、衰退を来し、更に蘇枋の舶載によって、漸く、この利用は押しのけられたようである。

後代、蘇枋染の発色に使用された明馨を、この茜に試用して、甚しく赤味をおぶるものをも染め出したらしい。所謂近代茜色である。

尚、万葉集巻一の額田王御歌「茜さす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖振る」——の「茜さす紫」は、もと、茜をさし入れる紫の染色の手法であり、これを縁語としたもので、前記したように「深緋」には紫に茜を加へたもの、後には枕詞ともなり、その生活文化の言葉が文学的に発展し、漸くその夕空の「深緋」の色を、茜色射す夕日——と表現するに至ったものらしく、またこゝに西空の緋色を染めるこの草に、「茜草」といふ文字をあてる心持も出て来たのかも知れないのである。

染色の山の麓や茜掘り (素丸)



AKANE



第一例

むらさき 紫草 (紫草科)

Lithospermum Officinale L. Var

erythrorhizon SIES. et ZUCC.

「むらさき」は和名「牟良佐伎」、別に「ねむらさき」「紫根」といひ、中国では「菰草」と書き「紫丹」又は「地血」の名もある。多年生の草本で、茎は直立、高さ二尺に達する。葉は深緑色、表面は粗糙で、葉脈は深く凹み、茎とともに毛茸に被はれてゐる。茎は淡緑色、六・七月の頃茎頂と葉腋とから花梗を出して、白い、小さな梅花に似た、五弁、五雄蕊一雌蕊の花を開く、その実は琺瑯質の淡褐灰色、滑らかな光沢ある堅い粟粒三倍大ほどのものである。

染色及び薬用とするのはその根部で、朝鮮人蔘に似た牛蒡根、長さ二寸乃至六寸、平均三・四寸位のもの。根皮は紫赤色、内部は黄白色、断面の中心には紫赤の髓があつて、一種の特異な香氣と甘味がある。

染料としての利用も相当に古く、漢(前二五〇)以前、「山海經」に「多菰草」とあり、註に「染紫也」とある。また「齊氏要術」に「種紫草」の項があり、「延喜式」によれば、既に「甲斐国八百斤、相模国三千七百斤、

武蔵国三千二百斤、下総国二千六百斤、常陸国三千八百斤、信濃国二千八百斤、上野国二千三百斤、下野国千斤」を貢進すると規定されてゐる。奈良、山城は勿論、四国、九州にも野生があり、また保護栽培をもしたらしく、天平の古文書に見える「紫草園」がその園圃だったのであらう。額田女王の有名なお歌「茜さす紫野ゆき標野ゆき野守は見ずや君が袖振る」(万葉巻二)の紫野がそれであり、標野はその自生を保護する為に標(しめ)を結った(所謂縄張りの)栽培地だったのであらう。そこに野守も出て来るわけである。

しかし、今日では勿論その跡方もない。私がこの書の旧版を成した昭和八年、漸くにしてこの眼に見た紫草は秋田県湯瀬の山中であり、その後八ヶ岳及び相模大山にても野生を見たが、この写真は、今、草木寺内植物園に花咲いてゐるものである。

※ 紫草の白い花



MURASAKI

紫草の発見、利用は或は染用といふより、恐らく薬用として先行し、後にその紫赤色が染用を引出したらしいことは藤原期に製出しはじめた南部紫根染の地方には、貼用して腫物を治し、悪疫の流行には草餅に捏ねて喫食し、またこの染めを着用すれば胸の病に犯されないといふ尊信があつた。

また、昔から婦人の髪油の中に浸した（紫赤色となる）ものを使用すれば頭痛を癒すとも口碑してゐる。「助六」の紫の鉢巻もその遺徴であり、「松王」の病髪（びんぱつ）の紫帛もそれに依るものであらうか。また通経の効を伝へてゐるが、この頃内服用避妊薬として研究されてゐる向もあるといふ。

染用としては、この根部よりその色料を抽出して、染着するのであるが、この抽出は、他植物の如く熱煎による手法ではなく、——といふのが、この色料は摂氏八十度以上に熱すると、変化して「紫」を染る色料を失ふからである。（六十八頁「染色」参照）従つて、この染色は至難とされ、また色料の収率が尠いことにも深大な苦心があつたが、唐制を影響し、「衣服令」の解によると「諸王諸臣ノ一位ノ服色、深紫。黄丹ノ下、蘇枋ノ上」とある服色のこととて、甚大な攻究が行はれたのであり、秘法にも至つたのであらう。

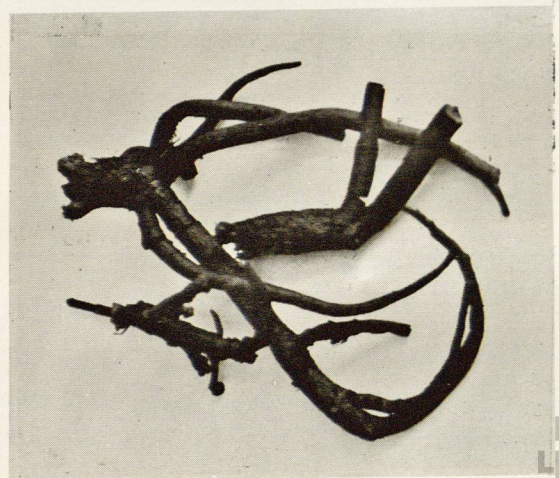
染色手法の一、その発色に灰汁（五十九頁「あく」参照）を使用したことは「万葉卷十二」「紫は灰さすものぞ、椿市（つばきいち）の八十（やそ）の衢（みち）に逢ひし児や誰」の因る所で、即ちこの椿（六十頁参照）の灰のアルカリとアルミナを利用したのだが、尚、南部（奥州地方）では藤原期の伝承をそ

のまゝに「さはふたぎ」（六十一頁参照）の灰を使用してゐる。

文献「延喜式縫殿寮式雑染用度」には「綾一疋、紫草卅斤、酢二升、灰二石、薪三百六十斤、深紫。」とあり、尚、「黒紫」また「浅紫」は、帛一疋に對し前者は紫草八斤、後者は同五斤を所要したもので、一は煮染による「減紫」（けしむらさき）であり、一は「蘇枋」（灰汁発色）（十六頁参照）に似た浅い赤紫。「令」に「諸王二位以下諸臣三位以上赤紫」とあるものであらう。

染色例の第二例は、古法による椿灰による発色。その第三例は、所謂「あかねさす紫」で、紫染に茜の色料をさし加へたもの、即ち延喜の「赤紫」（蘇枋の灰汁発色に相似した）生（なま）の伊勢海老の色——葡萄赤の色相であらう。

尚、紫草の採集については、恐らく江戸中期ぐらいまで、東北地方もがひどい衰滅に遇つたらしいのである。これは濫獲の結果といふよりは、その繁殖の上に産地、産土の在り方が適當でなくなつたからだらうと思はれる。例へば、落葉の有り方、下刈、除草、更



＊ 紫草の根部

MURASAKI (Root)



MURASAKI

にその日射の状態等である。

しかも、この植物には特に、土地に相当の高さとその冷たさが要求されるらしいのである。勿論その産土——黒ボエといふ一種のフヨウ土質の膨軟な土壤は必至である。

私共はこれを長く求めて、遂に八ヶ嶽に近い鉢伏山麓の一所——その傾斜地の畠地にその栽培を成し得たのである。

天皇様のお心入れに依る信州大学の研究に始ったその仕方で、その発芽を見たことからであった。私共の研究所はこれによって既に三十五年度の收穫量は生根（なまね）五十貫を超過したのであった。

AKAMURASAKI

しかし、自然——なるものゝ、おそるべきかなよ。とに角、この産品は、染材として根皮がやや薄いやうであり、従つて色量もいささか少いかのやうに実験されてゐるのである。或は自生品の自然的な産品に比して、相当多数を集中する栽培法に因るか、とも考へられる。しかも「生根」による染色では好結果を得たのである。

さう言へば、「紫草」は、花も白く、青葉も濃く、しかもその根を、土中に置きながら、その根辺の土をまで深く紫紅の色に染めてゐるのである。中国に「地血」の名のある所以であらう。



MURASAKI (Hive)

尚、古書には産地によつて品の上、下のあつたことが見られる。薩摩、南部を上品、出羽も上位にあり、讃岐、伊予これに次ぎ、大和、近江、河内、またそれに次ぐ、と。薬店では上品を染屋へ納め、屑片を医家に供したとある。

米むらさきの畠

紫草のにはへる妹をにくくあらば人孀故に吾恋ひめやも

万葉集卷一

託馬野に生ふる紫、衣に染め未だ着ずして色に出にけり

同 卷三

辛人の衣染むてふ紫の情に染みておもはゆるかも

同 卷四

すはう

蘇枋 (豎料)

Caesalpinia Sappan L.

蘇枋(すはう)は所謂「天竺」(てんじく)から渡来した植物染料で、日本では奈良時代から盛んに輸入し、利用してゐる。

これは支那にも産せず、専ら印度及び南方諸国に産するものなので、従つて知られること遅く、中国に於ても晉の永興元年に新版された、「南方草木状」(三〇〇)に、漸く現はれてゐる。「蘇枋。樹類槐、花黄黒子出ニ九真一、南人以染」絳」等とある。九真は安南の地名、絳は赤色である。

然し、これが日本にも知られると、その色が紫に近い赤色——當時、重要な「紫」——茜さす紫に近い紫赤色及び上位の蒲萄(えび)を容易に染める所から、非常な歓迎をもつて、その舶載を迎へたものらしい。

第四例



BOTANIRO

「衣服令」には既に「紫」次ニ「アリテ 緋」上タリ」とあり、「延喜彈正式」に「蘇枋」色。親王以下参議以上非参議ノ三位及嫡妻女子并ニ孫王並聴ニ著用」ともあり、「縫殿寮式」には「深蘇枋。綾一疋、蘇枋大一斤、酢八合、灰三斗、薪壹百廿斤、中蘇枋。同蘇枋大八両、酢六合、灰二斗、

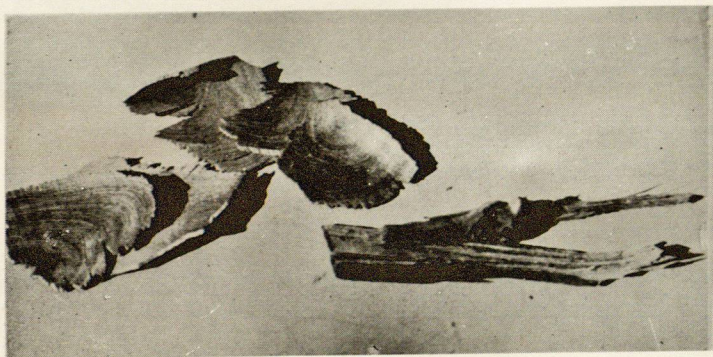
薪九十斤。浅蘇枋。同蘇枋小五両、酢一合、灰八升、薪六十斤、蒲萄。同蘇枋三斤、酢一合、灰四升、薪四十斤」を用度されてゐる。

これを見ると、まづ蘇枋を使用したのは当時、上位の服色である「紫」に近い発色を珍重されたことが判り、「縫殿寮式」に明記されているやうに、灰汁(あく)による発色は、量により多少の差異はあれ、すべて赤紫色といふよりも紫赤色といふに近い色相を現はすものである。即ち紫に近く、紅の上位に位する色彩であつた。

(尚、「紫」と「蘇枋」との中間を求むれば、「紫蘇」(唇形科)——

食料の梅漬、紅生薑を染める紫蘇の示してゐる色彩であらう。その草本の名称もまたこゝに出て来たものではなかつたか。)

然るに、後代に到つて服制が乱れると共に、灰汁の発色による色相は漸次衰微して、礬石(明礬)(頁六十二)によって発色した「赤緋」(緋)の色を、或は「きはだ」(頁二十五)「うこん」(頁三十六)にて下染した「紅緋」の色を染め、徳川期に及んでは鉄(おはぐろ)発色を応用して「鳶青染」「藤色染」等をまで染めて、いよいよさかんにこれの舶載を迎へたのである。



SUOH (Trunkbranch)

しかし、当時もその材質をば眼に見ても、その樹葉——生態を知る者は無かつたらしい。小野蘭山の「訳説」にも「浪華に皮を帯びるものを所持する人あり、之を見しに白皮の皮なり、その他形状を詳かに見ることを得ず」とある。

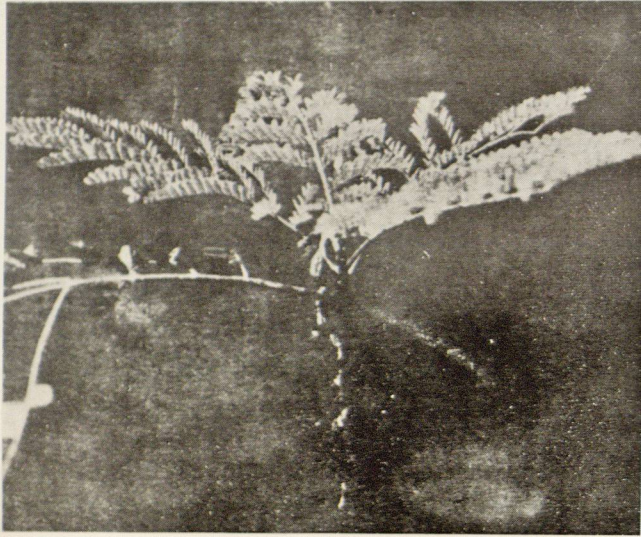
崔豹の「古今註」に「細破煮、之以染、色」とあるように、すべて細破し、また輪切りした黄褐色の粗屑、或は（色料の含有少なき表皮の部分は削除し）棒様に軽量したものを舶載したらしい。

尚、前頁の写真は輪切りされた幹材であり、左の写真は若木の一部で、昭和八年六月小石川植物園内温室で撮影した生態である。

これは有刺木本の

の喬木で、樹高五十尺にも及ぶといふ。葉は槐より合歡木（ねむ）に似た再羽状複葉で、春日黄色の小さい花を梢上、葉腋の上に円錐花を開き、実は扁平、豆に似た莢果で、はじめ緑色、後、黒色となるもの。

染色は、前記、この幹材を熟煎し



SUOH (Bukkum - wood)

米すはろ

その煎液を以て染める^(十二頁)のである。まづ、この細断された染材を鉄気のない鍋で煎出するのだが、「本草綱目」にも「煎汁忌^ニ鉄器^一即色黯」とある。

尚、この染色は、有機染料によるものの例として、その発色剤の化学変化に因って、実にさまざまの相違した色相を発する。

これを作例に見れば、その第四例は、その発色に「灰汁」を、第五例には「明礬」を、第六例は「鉄」を用ひた「藤紫」である。尚、至上の色「黄蘗染」^(くわろ)ぜんもこれと「蘆」^(五十一頁参照)の交染に成る。

又、この珍品の舶来は、当時の生活文化的なるものゝ一例として歌舞伎の舞台の上にこれが適用されてゐる。即ち、舞台に使用された「血」——その赤で、これは却って薬用されるほどの無害の煎液が常用されたのであらう。浄瑠璃の文句にも「……蘇枋を浴びたやう」の形容があり、真綿に包んで口に含んだといふ「噛みツブシ」の血にも利用されたが、すべて蘇枋だったのである。

田舎手織の、唐棧縞の赤の筋糸も、これで染めてゐた。江戸本町の薬屋で売ってゐたのである。



SUOH (Flower)



第六例

FUJIMURASAKI



第五例

AKA - IRO



べにばな 紅花 (菊科)

Carthamus Tinctorius. L.

「べにばな」は、和名「久礼奈為」「紅」「呉藍」「紅蘭花」「末摘花」等の異名がある。一年生草本の菊科植物で、茎の高さ三四尺、葉は広披針形で鋭い刺があり互生する。薊によく似てゐる。花は暖地は六月、寒地は七月頃、梢頭に紅黄色の、刺のある総苞に包まれた管状花を着ける。花後には白色の小豆粒大の白く光沢のある小さい堅果を結ぶ。

染用に供されるのは、その花瓣で、種子を搾って油を採り、墨(紅花墨)を製し、また、嫩葉は食用になる。薬用としては、花を「乱花」(らんか)といひ婦人薬とする。所謂「田舎サフラン」である。

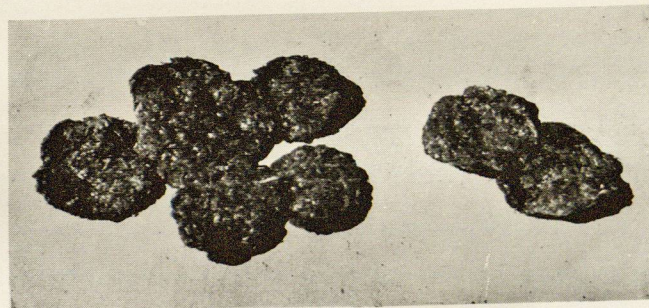
この染料は、「あかね」「くちなし」に遅れ、「すはう」より、いささか早く知られた紅色染料で、その染色觀念が極めて原始的な、第一期的な觀念でありながら、この「紅花」の場合は、その手法が極めて科学的であることに興味がある。また、色素としても極めて類例の少ないものである。

従つて、これの実用が、いささか遅れたといふことも首肯出来るわけで、即ち、この花の色素「カーサミン」(Carthamin)が、他の花の色素とその構造を異にするに對し、この色素の存在を万花の中に検出、またその色素を溶解し、発色させる手法を発見したといふ

ことは実に驚くべき事実だったのである。

染色はまづ、その花瓣を摘みとる(花瓣の先端を摘むので「末摘花」)にはじまる。即ち、春彼岸に種蒔き、六・七月の交、この開花を見れば、晩に起きて朝露の中に摘むのである。これは薊に似た花苞の刺の濡れて柔軟なる間にするため、「明けぬ中から畑辺に行きて、見れば美し花明り」といふ「花摘唄」もある。それから「白毛ボッチ」を取除いて、半切桶に入れ、水を注いで、花をよく踏みつけ、黄色の液汁を流れ川で抜き去り、これを花薺で蓋ひ、適度の水分を与へて、三昼夜間を寝かせ適当に腐熟した時を計つて、能く手で揉み合せ、一個を丸く四センチ位にのばして薺の上に並べ、日当りで乾し上げると、所謂「花餅」(下図)が出来る。これは貯蔵に便するばかりでなく一種の醗酵を受用してゐるのではないかと思はれる。

さて、「花餅」を持って、染色に入るのだが、ここに用意されるものは例の「灰汁」と「酢」である。灰汁は「藁灰汁」(五十九頁参照)または「木灰」、或は「紅」製造用としては「あかさ灰」(六十一頁参照)を使用する。現代的には「炭酸加里」を用ひるものだらう。これ



BENIBANA (Hanamochi - Petal)

はなもち

は、色素を花瓣中より抽出するためで、「酸」(酢)はまた、溶出した色素を発色、吸収、染色させるためである。「烏梅」(頁六十(四))又「生酢」或は「枸橼酸」を用意するのである。

かくて、「花餅」を一昼夜間、水に浸して置き、これをよく揉みほごし、更に水を加へて、その黄色の水溶液を分離し盡し、これに「灰汁」を注加すると、殆ど紅色を呈してゐた花瓣はたちまち黄褐色に変ずる。これをしばらく静置し、液中、再び多少の紅色を帯びる



BENIBANA (Flower)

＊

眉はきを倂おもひかひにして紅の花

行末は誰がた肌触れむ紅の花

芭蕉

を見て、麻袋を用ひて、この溶液を他の容器に漉し込み置き、この液中に「酸」を注げば、液は忽ち鮮紅色となる。即ち、この液中に染色を行ふのである。尚、被染色物を浸染し、更に少量の酸を入れて、吸収させれば即ち了るのである。

尚、「紅」(京紅・寒紅)の製法は、これの染液中へ更に酢を加へて、清水に洗ひ、純化、沈澱させるのである。

「べにばな」の支那に於ける歴史は〔開宝重定本草〕(九七〇年)に「紅藍花。生三梁漢及西域一名黃藍」とあり、晉の、崔豹の〔古今註〕に「燕支。葉似薊、花似蒲公」と、よくその生態を示してゐる。わが国また〔天平古文書〕に「烟子、烟紫」とあり、〔本草和名〕(九〇〇年)には「紅藍花。作三燕支者、和名、久礼乃阿為」とあるのである。〔衣服令〕の「緋」は「蘇枋」の次「黃櫨」の上であり、〔日本紀〕「浄位已上並著三朱華」の「朱華」はこの紅花染による「あかき色」の総称であらう。〔日本紀略一〕(延喜四年九〇四)には「禁三制美服紅花深淺色等」とあり、〔延喜縫殿寮式〕の用度には、「韓紅花。綾一疋、紅花大十斤、酢一斗、麩一斗、藁三曲、薪百八十斤。中紅花。同紅花大一斤、酢八合、藁三曲。退紅、同紅花小八両、酢一合、藁半曲。」と記録されてゐる。「藁」は焼いて灰汁を収用したものであらう。

この第七例は紅花のみによる「緋」であり、第八例は万葉集の「桃花褐」(ももぞめ)——「紅」(べに)を造る直前の紅液で染めたもの、万葉卷十二、「桃花褐の浅らの衣浅らかに念ひて妹に逢はんものかも」の色彩であらう。尚、第九例は「くちなし」(頁参(四))に下



第九例



第八例



第七例

BENI-IRO

MOMOZOME

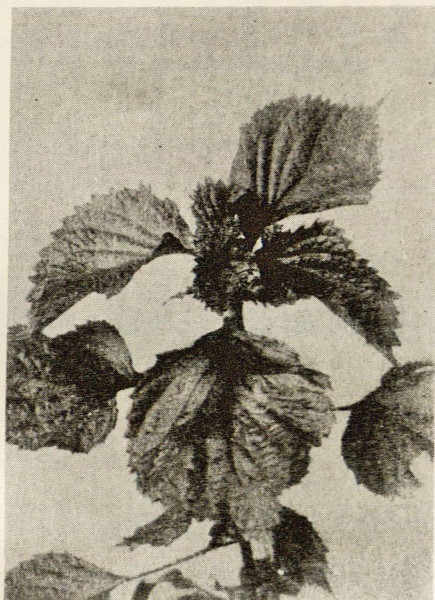
HI-IRO

染した「紅いろ」である。
また「あらぞめ」とは、どんな色相であつたか。「紅花小八両、酢一合」とあり、「桃花褐」とは相違する色相に思はれる。尚、交染したものには、至上に次ぐ上位の「黄丹」(わうに)がある。(令)の太子の礼服であつて、太陽いまだ出でざる直前の曙の色であるといふ。「紅花大十斤八両、支子一斗二升、酢一斤、黄四冊」と「縫殿寮式」にあるもので、尚、(同式)には「深支子」「浅支子」に紅花の使用を挙げてゐる。後代に到つて、「茜」による「緋」に代つて、紅花と「うこん」とを交染した「紅緋」が流行した。発色は共に「梅酢」(六十四頁参照)また「生酢」で、鮮美な、所謂近代の緋の色を発色して来た。
然し、紅花染も漸く衰退、栽培も今は衰微し、「花餅」の製造は僅に東北、最上川畔、山形県下の一、二カ村から産出されるに過ぎない。尚、薬料としての「乱花」は近年長野県下その他に産出されてゐる。

しそ 紫蘇 (唇形科)

Perilla frutescens BRIT. Var. *crispa*

MAKINO *f. purpurea* MAKINO



SHISO (beef steak plout)

「しそ」

は原産支那の一年生草本で、その葉は紫紅色の一種の芳香を以てよく人に知られ、梅漬及び紅生薑

の色を紅く染めてゐる。

染色としては記録されたものはない。しかしこの色料をアルカリによつて可溶性とし、烏梅または枸橼酸で発色する手法——紅花染(十九頁参照)の手法を試みて本研究所はこれを、紫より紅く、紅より紫氣を潜むる一色を発色すべく実験中のものである。

「衣服令」によれば紫は蘇枋の上位にあり、蘇枋は紅の上位にある。即ち紫と蘇枋の中間に位する色相を、この植物「紫蘇」が、その名を呼び取つたかにも考へられる。

研究所は、これを「花餅」(十八頁参照)とすることにはじまる手法を、考究してゐるのである。



あ る 藍 (蓼科)

Polygonum tinctorium LOUR.

「ある」は、〔本草和名〕及び〔和名抄〕に「たである」「多天阿井」「阿為」とあるもの。支那の南方地方の原産で、陸田又は水田に栽培する一年生草本である。茎は紅色を帯び、枝多く高さ二尺内外、葉は長卵円形又は狭長形(口絵参照)のものがあり、互生し、葉柄の基脚に膜質の托葉があつて茎を包んでゐる。秋、開花、莖頭葉腋に長梗を抽き紅色の小花を穂状様に簇生し、花後赭褐色の光沢ある三稜形の瘦果を結ぶものである。

染用として、その葉及び茎を材料とすることは人の知る所で、今では単に「藍」と言へば専らこの種類に限られ、その他を「山藍」(二十三頁参照)「琉球藍」(爵床科) *Strobilanthes flaccidifolius* Nees. 「印度藍」(蓼科) *Indigofera tinctoria* L. 「大青」(十字花科) *Isatis oblongata* DC. 等と區別してゐるが、上代この以外にも、「棒」(六十二頁参照)が「都波岐阿井」〔和名抄〕として摺られ、「麦」〔目波志木〕の葉も、「山藍」に代用されたりしく、尚さまぐの青草が、緑葉が試用されたのであらう。

「色土」にも求め難く、漸く「草摺」^{くさずり}を試み、「緑葉摺」に到り、

遂に「山藍」を識別し、「蓼藍」を鑑別し、所謂ある類を類別して実用するまでに、何程の世紀がその発見、実験に費やせられたかを遠く思ふばかりである。

然も、遂に「摺染」をも蟬脱して、「藍染」即ち、藍による浸染の手法が行はれるに到って、「衣服令」に独自の色相、「紺」を位置し、また「縹」^{はなだ}の色を挙げられ、「延喜式」に「支子」「刈安」「黄蘗」等と交染して「緑」の諸相を発色し、後には「蘇枋」を交用して、修紫(似せ紫)——江戸紫を染色し、尚、単独にて「縹」の諸

米 藍 の 畑



AI (field)

相を染め、更に後代、所謂「藍下」即ち、これを下染として、「藍下黒」(四十四頁参照)をはじめ、さまざまの雑色の美しさを染め、染用第一のものとして、「母」なる地位を獲得したものである。

染用としてはまづ、「藍」(前頁参照)を栽培し、これを「藍玉」に造ることにはじまる。即ち、春、苗床に種蒔き、苗二、三寸に生長すれば、これを本圃に移植する。かくて、ノ粕を基肥とし、度々追肥をし、土地乾燥すれば水肥を与へて、移植後七八十日、開花に先んじて收穫するのであって、刈取ったまゝ地上に広げて、天日で乾燥した後乾葉を扱き落し、土蔵内の「ねかし室」に積み上げ、時々適当量の水を注いで数日間放置すると漸次醗酵を起すやうになる。これを時々攪拌して一定の温度を保たせ、且つ一定量の水を与へればバチルス・インデゴゲナス *Bacillus Indigenus* と称へる黴菌の作用で、最初から凡そ八十日を経過すれば黒色芥状の「菜藍」(すいあろ)が出来る。これを臼に入れて少量の水を混じ、搗き固め、扁円形、または長四角形の小块とする、これを「藍玉」といふのである。左図写真のものがそれで、扁円形は信州筑摩野産のもの、四角形の小块は阿州産のもの。

然も、この「藍玉」の一つには貯蔵に便する方法ではあるが、これで直に染用に入ることには出来ない。これを所謂「藍甕」(あぶがめ)の中に、破碎して入れ、次の如くにして、まづ「アルカリ性」の水中に溶解し、その溶液によって初めて染色に入るのである。この手法を「藍建」(あぶだて)といふ。

「藍建」の手法については(染物早指南)(嘉永六年版)には「染物第一藍甕の法。十が一にしるせり。水三荷入位の瓶のよく薬のまはりたる無きなる瓶を多らみ、都合よき所へいけ置事なり。藍玉半俵、よくこなしてこまかになして、重あく(木灰汁)二升五合、石灰一升各口伝。水、一斗づゝ四日入る。手桶などにて水一斗の分量をはかり置て毎日四日の内一斗づゝ藍瓶へ入るゝなり、扱五日めより、薄藍五・六升、三日が間毎日入る。是までつかひたる藍のうすく成たるをいふなれど初めて製するにては水にてよし。ふすま、一升煮てこして汁を入れる。七・八日めにて藍瓶成就す。寒気の時分には藍瓶の傍に火気を帯て染る事なり、暖気の節は其事なし。尚、藍掻棒にて度々かきまはす事なり」とある。かくて、この「藍建」が出来れば、この中に浸染するのであって、先づ、一回にして第十例の色相となる、所謂「甕覗き」(かめぞ)で、尚、二・三回にて第十一例の浅黄色となり、十数回、その濃度を上げて「紺」(第十二例)となるので、これは(衣服令)の緑の次、縹の上にあり、「装束色囊」「紺含也」(三青而含二赤色)の色相である。すべて、空中、又水中酸素を收容して発色するのである。



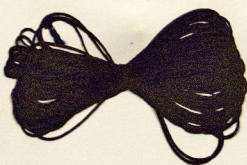
KAME-NOZOKI

第十例



ASAGI-IRO

第十一例



KON-IRO

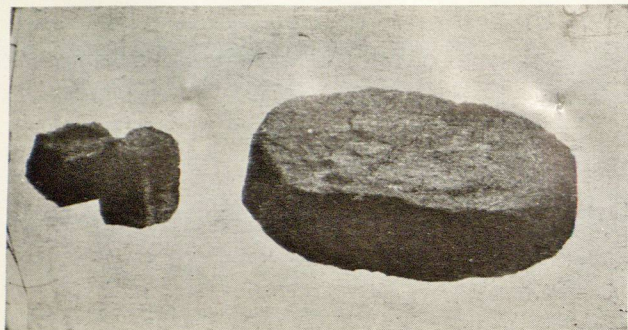
第十二例

これは相當に複雑な伝承的の操作であつて、全く先人に対する驚異であるが、それ丈にこれはやゝ専門的の難かしさがある。今後、より科学的な、簡易化の爲の研究の必要を痛感するのである。

薬用としては「解毒」に効があり、ヘントウセン疾患にも効があり、また、酸素を多量包含してゐるので殺菌力がある。

兎に角、人間、色感を差別した対象は、天地玄黄、即ち光の黄であり、暗の黒色であり、即ち天地の色であり、曙及び夕陽の赤であり、大空の青色であり、樹草の緑であり、五彩の花の色であり、空に馳ける百鳥の百色である。しかも、染色の始発に於て、「書経、舜典」の所謂「三帛」の「縹^{そひ}」(赤)「玄^{くろ}」(黒)「黄」の「色土摺」の中にも、「青」及び「緑」即ち「藍」は現れて居ない程に、顔料としては兎も角、染料としても、青色を止めることは困難だったのであらう。

＊藍玉



AI-dama (indigo-boll.)

偉なるかな、——藍染の發明と、その実用。



AI (Flower)

やまある 山藍 (大戟科)

Mercurialis leucocarpa SIEB. et ZUCC.

山野の湿地に自生する常緑の多年生の草本、高さは一、二尺、葉は蓼科の藍に似てゐるが楕円形で鋸齒がある。晩春、淡黄色の小さい花を穂の様につける。「貞観式」の青摺袍の註記に「其表以三山藍一摺^レ之」とある。「蓼藍」にくらべて色素が少なく、後この実用は衰えたが、山野自生のこれを清浄として、神事には使途したらしく、御大典の小忌衣も、男山八幡の社域のものを收用するといふ。

〔延喜縫殿寮式〕には、「深緑。綾一疋、藍十疋、刈安大三斤、灰二斗、薪二百四十斤。深縹。綾一疋、藍十疋、薪六十斤」とある。罍、これは乾葉を計ったものらしい。(「染色」六十九頁参照)

染法としては

木藍と共に蓼藍より原始的で、所謂腐熟による「泥藍」の法によるもので「そよご」(五十頁参照)の染法に似てゐると見られる。



YAMAAL



くちなし 支子 梔子 (茜草科)

Gardenia jasminoides ELLIS

Var. *glandiflora* NAKAI



KUTINASI (Capc-gasmine)

「くちなし」は、多く園地に見られる常緑の灌木で、幹の高さ五、六尺、樹幹は直立して叢生し、葉は対生、長楕円形或は広倒披針形といふ形状で、色は濃緑、光沢がある。七月強い香気を放つ白い花を開く。花冠は肉厚く六、七片に裂け、実は漿果で卵形又は長楕円形、六・七の稜角があつて、その色は黄紅色である。染料としては、成熟したその実を採って、よく乾燥して收藏するのである。

染用としては、

古く、「かりやす」(二十六頁参照)に先んじて利用されたものらしい。「和名抄」には「久知奈之」また「支子」ともある。古代の「色土摺」すなはち黄色の「黄土摺」について、浸染による手法の第一発

第十三例



KOHJI-IRO

として、青草、緑葉の「摺染」と前後して、その黄ろい実の黄色は、いち早く、そのまゝでも使用され、また本草薬の煎方に示唆されて、これを煎じ出し、更に灰汁あくを使用して、発色を定着する手法を習得したのではないかと思ふ。

漢(前二五〇)の書「説文」にも「木実可染」とあつて、すでに「梔」の名をあげてゐる。「衣服令」「白」の次、「紫」

第十四例



MIDORI-IRO

の上位の「黄丹」も「紅花」との交染である。(十八頁「紅花」参照)「延喜式縫殿寮雜染用度」には、明かに「綾一疋、紅花大十斤八両、支子一斗二升、酢一升、藁四曲、薪八十斤」と記され、藁灰汁と酸とを発色に用ひた手法が出てゐる。尚、こゝには「深支子。紅花大十両、支子一斗。黄支子。支子二升、紅花小三両」と明記されてゐるやうに、支子の性質にある赤味を利用し、後代には、発色に明礬を使用して、アルミナ塩による赤気の発色を求めてゐる。

その栽培については「延喜式卷十五」に「支子園、山城国二園」等の記載がある。上頁の歴史であらう。

染法は単純で、その実を生のまま揉み潰し、或は煎出して灰汁、又は明礬で発色する。第十三例(柑子色)は明礬を使用し、第十四例(緑色)は「藍」と交染したものである。(六十六頁「染色」参照)

きはだ

黄膚 黄蘗 (芸香科)

Phellodendron Amurense RUPR.

和名「岐波太」「黄栢」又「黄蘗」とも書く。山地に自生する落葉喬木で、高さ五、六丈に達し、樹皮は厚く木栓質に被はれ、外皮は灰白色、縦皺があり、内皮は黄色、「黄膚」とよばれるわけである。葉は羽状複葉で対生し、各小葉は被針形乃至卵状被針形、雌雄異株で、晩春 梢上に黄緑色の小花を附ける。雄花は総状 雌花は単位。晩秋に球形の黒色の核果を結ぶ。豆粒大で苦味がある。



第十五例

KIHADA - IRO

第十六例



SEIJI - IRO

染用としては「支子」(前頁参照)に少しおかれて飛鳥前後から知られたもの、「天平古文書」にもその名が現はれ、「衣服令」の「緑」にも使用されたらしい記録があり、尚、「延喜式縫殿寮式」の雑染用度には「藍」(廿二頁参照)と交染して「中緑」「浅緑」「青緑」「深緑」「中藍」「浅藍」「白藍」の染色に用度すると明記してある。勿論、これは「黄色」の色料で

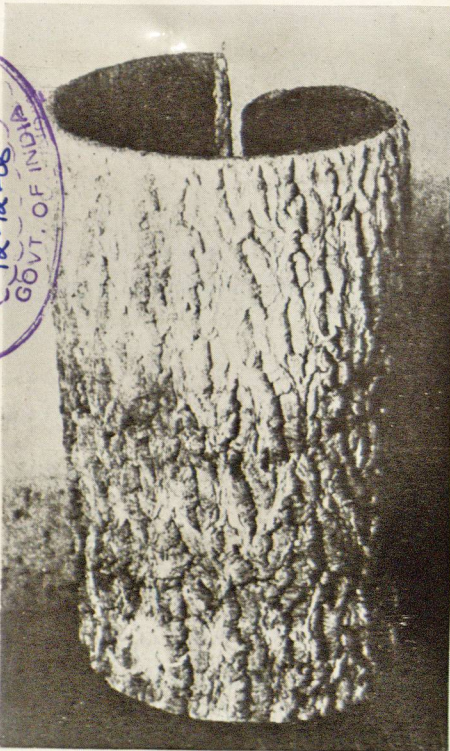
あるから、緑色には「支子」また「刈安」と同じやうに交染したが中色や浅色の染色には、くちなしやかややすと交染したものより、これを使ったものの方が鮮やかで、美しかったからであらう。

尚、発色には、酸性のものでも、中性でも、また灰汁、石灰水によるアルカリ性のものでも、同様に使用される利点がある。

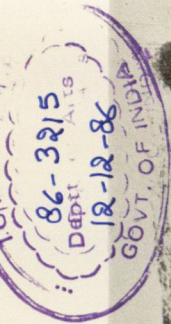
染材とされるのは、樹皮の部分で、これを剝離して乾燥し、細片に切って收藏する。これを染用に先だって熱煎すると黄色の粘汁が滲出する。これで浸染して発色するのだが、この色料は日光にやゝ弱いので、充分に浸染を行って染度を少し濃くする必要がある。

尚、この煎汁は苦いので、「虫除け」になる。天平の「黄蘗紙」(きはだ)はその為にも、この色料を使用して、黄色を染めたといふ。

樹皮は薬用として、健胃に、また打撲傷に特効がある。染色例の第十五例は「烏梅」(酸)による発色。第十六例は「藍」との交染。



KIHADA (bark)



かりやす 刈安 (禾本科)

Miscanthus tinctorius HACK.

一般には「かりやす」は、所謂「きぞめぐさ」(黄蘗草)として、「灰汁」によって、黄色乃至黄褐色の色相を染める禾本科植物の数種類を総称した物名であるらしい。

早く「唐本草」に「此草似竹而細薄葉亦円小、生平沢溪澗之側、荆襄人煮以染黄色、極鮮好」とあり。「證類本草」には「蘊草可_三以染、黄作_二金色_一」とあって、此草は「蘊草」と明記してあるが、これは和名「こぶなぐさ」のことであり、八丈島では専らこれを以て「黄八丈」(三十六頁「うこん」参照)を染めたのであるが、「延喜式」によれば、これは近江国の産の所謂「近江刈安」で、本邦に於ては却ってこの種類が普通に「刈安」として実用されたいのである。即ち、「延喜式」ではこの刈安の産地を近江とし、五百圓を賣する事を載せてある。「やまかりやす」「そめしば」とも謂はれるもので、尚、「のがりやす」「すいばかりやす」「かりやすもどき」等類似したものもあり、多少代用されたいらしく、また「染物早指南」には「茅」とし、染料としてゐる。

兎に角「和名抄」の「刈安」また「加木奈」、「本草和名」の「加

伊奈」また「阿之為」はこの総名題と見ていゝと思はれる。共に古代から「支子」(廿四頁参照)と共に、或は「支子」にやゝ遅れて、浸染による手法の当初に登場したもので、まづ「灰汁」(五十九頁参照)によって黄色を発色したのであらう。「煮以染黄色、極鮮好」とある、それである。煎薬の煎出に示唆されたのもあらうが、染色を植物に求めた場合「支子」のその実黄ろく、直にその指をも染める実験に次いで、晩秋の叢を黄ろくしてゐるこの植物に、「黄」の色料を感じたことは原始染色的だと思はれる。しかも「支子」の色相が赤味に勝つてゐるに對し、この色相は青気を持つ所に興味ある對照をなして居り、尚、「黄蘗」もその黄色の中に、これはまたやゝ白味を帯びてゐる処に相違がある。



KARIYASU (Stem)

米かりやす

かくて、その相違性は、後來にいいよ考慮され、利用されたのであって、「縫殿寮式」に於ても「黄丹」には「支子」と交染し、「深緑」(「二十」頁ある「参照」)にはこれを、「浅緑」には「黄蘗」を交染してゐる。

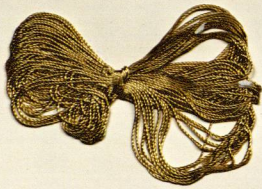
殊に、「日本紀三十」(持統帝七年正月詔)には「令天下ノ百姓ヲシテ服中黄色上奴ハ自衣」とあって、黄色はすべて「かりやす」に依らせたものらしい。これはこの染料が各地に多産して、庶民の用に適したのかも知れないが、他の理由として、「衣服令」に至上に次ぐ「黄丹」の色相があり、それは「支子」による赤味ある黄色を執って交染してゐるので、これを禁じ、これに似たるを禁じ、即ち「刈安」の青味の黄を許したものかと想像するのである。位階色即差別色である。

第十七例



AO-KIIRO

第十八例



AOCHA-IRO

染色の手法は簡単で「染物早指南」に「釜に入れ、よく煎じ置て、さまして使ふ」とある様で、染用に先だてて、その茎葉の部分で、煎出に便利な様に細断して、黒褐色の液汁となる迄、よく煎じ出して置く。注意としては、熱煎にはなるべく強い火力がよいといふこと、煎汁を出し殻から分離するに、早速にしないと

煎汁が殻中に還元し易いこと。

即ち此煎汁に浸し、これを「灰汁」または「石灰水」の中で発色すると第十七例の、青味のある黄色となり、若し「明礬」で発色すれば、これに反して、やや赤味を帯びるもので、これは後代の手法であり、更に、後に於ては、これを「鉄漿」の中に発色して第十八例の青茶色をも染めて居る。

生態は、「すゝき」に似てゐるが、これより葉は細く、穂の形は三乃至五、六条に分岐してゐる多年生(藎草は一年生)で、秋日その穂を抽いて白く光る。

また小野蘭山によると「伊勢、播磨ともに産すカリヤスと云ふ草あり、葉の形、芒に似て穂一条にて長し、葉四五尺に至る、コブナグサの形状本条に的当す、カリヤスは自別なり、然れども黄を染るに至っては同趣なり」とも言つてゐる。

染用としては穂を出す直前、所謂「穂ばらみ」の内に刈り取って乾して收藏するもので、「秋風が立ったら刈れ」と口碑されてゐる。薬用として、悪瘡を洗ひ、蕎麦の食傷にも効があるといはれてゐる。



KARIYASU

くぬぎ 櫟 (穀斗科)

Quercus Acutissima CARR.

「くぬぎ」は上代より黒染の料であり、また黄褐色の色をもこれに染めたものである。「はん」と共に最も古く意識された染料で、これもまた黒灰摺に始まったものであらう。殊に、この実、即ち穀斗は「櫟」と称されて、「衣服令」に「黄櫟」「櫟墨」と挙げられ、「延喜式縫殿寮式」の中にも、「搗櫟」の実用例がある。

「黒摺」としては「榛摺」の中へ「栗」「椎」「胡桃」等と共に吻合されてゐたものらしいが、煎汁による染色となつてから、この穀斗による黒染は他のものより、その黒色の中に紫紺色を多く発色してゐることを知った様である。後代、慶長の「公家諸法度」に、「親王ノ袍。櫟。大臣ノ袍。櫟」とあり、即ち、樺金染を以て「やしやぶし」同等、或はそれ以上に、紫紺色を発色したものかも知れないのである。従つて、「櫟」とある式服の場合には、敢にこの穀斗を使用したものらしく、平常の用途には、その樹皮、または椎、櫻、かしは等の実や樹皮までも実用したのであらう。

染法は、古来、二つの発色法に分れてゐたらしく、一つは黒灰摺及び土発色による染色に伝承された鉄発色であり、一つは灰汁発色による手法であらう。「衣服令」の「黄櫟」は「緋」の次、「縹」の上にあって、相当に黄褐色を現したものであって、恐らく、灰汁

媒染によつて、上位の「黄丹」に対して明確なる差別を現してゐたものらしいが、昔のことは兎も角、第十九例はこれを鉄で発色したもの（つるばみ）であり、第二十例は灰汁で発色したもの（きつるばみ）である。

かくて、おもふに、「衣服令」の

「櫟墨」は、恐らく、黒灰摺の黒染であり、タンニン質を含む同科の植物の鉄発色によるものではなかつたらうか。また「延喜式縫殿寮雑染用度」によると、櫟色は、「綾一疋、搗櫟二斗二升、茜大二斤酢七升、薪二百二十斤、糸一絢、搗櫟六升、茜大六両、酢二升、薪二十斤」とあって、酸性を以て発色してゐるもので、即ち、「浅支子」の次であり、「深緑」の上の服色、一種の黄褐色をなすものとおもふのである。ともあれ、「縫殿寮式」にある染色はすべて、鉄気による発色を用ひず、これによる黒、鼠、茶等を全くしてゐない様である。



KUNUGI (Silk - Worm Oak Livingstate)

くぬぎ

米くぬぎの樹皮



KUNUGI (barl.)

従って、「衣服令」の「柴」^{しばぞめ}は、この樹皮、或は「栗」「櫟」「柏」の樹皮の鉄発色による黒色乃至灰汁をこれに加へた黒褐色染であつて、最下位の「橡墨」^{すみぞめ}は、依然、摺染によるこの科の植物の黒灰染の色相を位置させたものであらう。

「くぬぎ」は、林野に多く自生する落葉喬木で、幹高さ数十尺、葉は長楕円形被針状をして、側脈著しく、縁辺に鋸齒があり、其形稍栗の葉に似てゐる。春日、単性の花を雌雄同株に着生し、雄花は黄褐色で柔荑花状をして下垂する。幹は灰白褐色、堅皺を強く示したコルク質の表部を有す（右図）、染用に供するのはこれを剥皮乾燥したもの。尚——堅果は殆ど球状をして碗状の殻斗内にある。樹

第十九例



TURUBAMI

第二十例



KI-TURUBAMI



どんぐり (Donguri)

米くぬぎの実



KUNUGI (fruit)

皮及び殻斗を染料に供する外に、樹皮を製鞣用にも用ひ、また皮つきの材は椎茸の培養にも利用される。
またこの類、新緑時の若芽を採つて乾燥したものも鉄発色で黒を染め得る。タニンを相当に含有するからである。

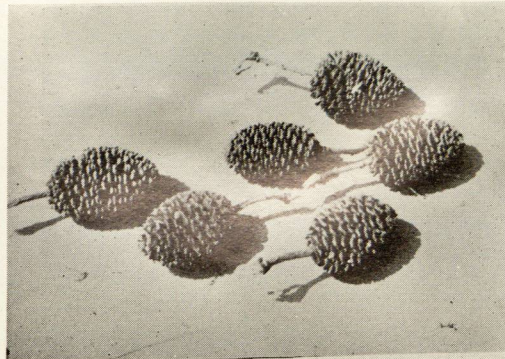
上図写真は「くぬぎ」の堅果（どんぐり）である。

やしゃぶし

夜叉附子 (樺木科)

Alnus Yasha MATSUMURA

「やしゃぶし」は、一名「おほばみねばり」別に「おほばやしゃぶし」ともよばれ、「みやまはんのき」もこの一種である。また、崖地の禿げた所に叢生するので「はげしぱり」ともいふ。音に充当して「矢車」「夜叉」「夜叉附子」とも書く。「八汐」といふのもこれ。



YASHABUSI (nut)

＊やしゃぶしの実

山野に多く自生する落葉亜喬木で、「はん」より丈低く、樹皮は帯赤赭黒色で、緑白色の斑点がある。一寸「はんのき」に似てゐるが、その違ふ点は「はんのき」の葉は中肋脈の両側に十箇前後の側脈を持つてゐるが「やしゃぶし」はもっと多く通常十五箇以上ある。春日、単性の花を雌雄同株に開く。雄花は暗紫褐色で穂状をして下垂し、雌花は

第二十一例



BUDO-NEZU

第二十二例



KURO-IRO

緑褐色の長楕円形をしてゐる。果実は楕円形で、外形、松毬に似て大さ七、八分、熟すれば黒褐色に変ずる。

染用されるのは、実で、上代に於ける黒灰摺、即ち「榛摺」に、主として用ひられたのは、この実と「はん」の実を混用したらしく、「榛」として、この種類の松毬形の実が、大小長短を、す利用されてゐたが、後年、煎汁をもつて浸染をする様になつてからは、この「やしゃ」が「はん」の実よりも、より多い濃度の染汁を出すことを知られ、専らこれを利用することに定着したらしい。

「やしゃ」は字音に充当して「矢車」と書き「夜叉」とも書いてゐるが、この矢車が不図して思ひ誤られる「矢車(やぐるま)草」とは関係はなく単に用字が同じだといふだけであるのに反し、この「夜叉」は「黒」であり、夜の色であり、或は鬼の世界を現す色——黒であるかもしれないのである。

然し、煎汁による染色では、鉄漿で発色すると、第二十一例の如き美しい「葡萄鼠」を発色し、更に濃度を高めると紫黒色となる。

兎に角、今日の手法によって、黒染をするには、この濃煎汁に、

「やまもも」(しぶき) (三十九頁参照) の濃煎汁を混じて浸染し、鉄漿で発色するのである。第二十二例がそれである。

尚、「三内秘記」にある「袍。四位以上は紫、フシガネ染也」とある。「樺金染」(三十二頁参照) は「五倍子」だけではなく、或時代にはこの「やしゃぶし」をも慣用したらしい。それほどに、これによって、「紫」に近い色相を染出することが出来るのである。徳川末期までは重要な染料として「染物早指南」にもこれをあげ、「丸のまよく煎じ置いて、ましてつかふ」とある。また、「黒八」の黒はこれと「鉄気土」で発色した黒染だといふ。所謂「田圃染」である。

＊ やしゃぶし



YASHABUSI

思ふ子が衣摺らむ
ににほひこせ島の
榛原秋立たずとも
万葉集第十

み ん ぶ し

五倍子 (漆樹科)

Gall-nut

「みんぶし」は、漆樹科に属する「ぬるで」即ち *Rhus javanica* L. の翼葉に寄生する蟲癭で、また「ふし」ともいふ。「ぬるで」は「かづのき」(可頭乃木) また「のでのき」の異名があり、「みんぶし」を生ずるので「ふしのき」とも呼ばれ、また房状のその小さい実が鹽からいので鹽膚木ともいふ。

第二十三例



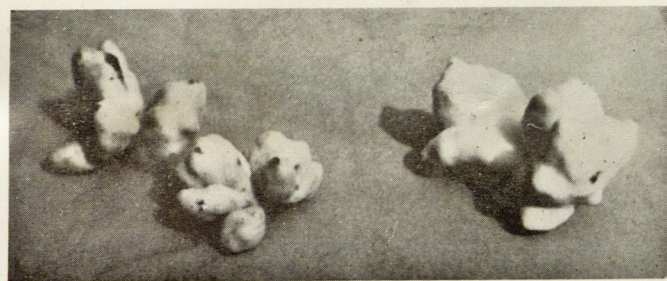
HATOBA-NEZU

第二十四例



BUDO-NEZU

山野に自生する落葉喬木で、生長速く、樹長は二丈余にも達する。樹皮は淡灰褐色、滑かで光沢があり、葉は羽状複生、葉柄に翼があり、葉縁に鋸歯を有し、葉の色は表面緑色、裏面淡青色白浮毛に被れてゐる。雌雄同株。花は枝梢に出で花梗尺余、尖塔様の総状花をなし、その小花は緑白色である。八、九月の交、開花十月に至り実が成熟する。円扁で黄褐色、白色の短毛を密生し、表面一体に白色の鹽様のものを生ずる。古人謂ふ所の木鹽



(MINBUSHI) Goll-nut

で、これを食用に供した時代もある。晩秋の山野に魁をなす「ぬるでもみぢ」こそこの「みんぶし」の寄生主だ。

「ぬるで」に寄生する五倍子蟲は、有吻類の蜣属に属する昆蟲の一種で、幼蟲は漆黒色、微小な虫で、五六月の交、「ぬるで」の翼葉の上に、小さい青白色の蟲癭を作って寄生し、漸次發育し七月上旬豌豆大となって五倍子の形を現し、漸くその色白青色となり、秋彼岸頃に至って生長の極度に達し、黄赤色、あだかも珊瑚珠の如き美しさを見せる。この時機が「みんぶし」採取の時期で、時日を経過すれば、内部の五倍子蟲は蟲癭を破って有翅の成蟲は飛び去る。

かくて、蟲癭を出た子を孕んだ成蟲は、附近の「ぬるで」の梢上に産卵し、母蟲は死し、卵は孵化、落葉後は萌芽の毛茸の間に潜伏して越冬、春の芽と共に成長して、連年「五倍子」を生ずるのだ。

染料としては、採取した「みんぶし」は即刻、そのまま蒸し、糸に通し珠数つなごの形で乾燥する。これは五倍子蟲を蒸殺して脱出を止める為で、成蟲は蟲癭と共に多量のタンニンを含むので、尚、樹皮も、葉もタンニンを多く含むので乾燥して染用に供する。

染色には「みんぶし」を鉄分なき釜又は鍋の中に入れ、熱湯をそそぎ、強い火力で煎じ出すのである。



Goll-nut be Parasitic on NURUDE TREE

この「みんぶし」を鉄発色の冷液で染めたものに、第二十三例の「鳩羽鼠」があり、紫鼠の青気あるものであり、染浴を熱して染め上げると赤味を生じて、「葡萄鼠」(第二十四例)となる。所謂、前者は鳩の青紫の羽色で、後者は葡萄の熟した色に比したのであらう。

尚、古代これを濃色にして「深紫」に代用した時代もあるらしく「装束色彙」に「金ニテ染ム濃紫ノ由也」とある。時代はよく判らないが、深紫の袍を、所謂「樺金染」(ふしがねぞめ)にもしてゐたらしい。紫の困難な染色を避けて、五倍子の易きについたか、或はその時代の支那の服制に倣ったのか。「桃花藥葉」には「黒半臂、表濃打、裏水色、濃打ハ五倍子鉄漿染也」と明記されてゐる。

尚「みんぶし」は收斂剤として用途される。昔日、婦人が歯を染めるに鉄漿と共に用ひた粉末「かめぶし」は、これと「やしゃぶし」とを混ぜたもの。又、皮革の製鞣に重用されてゐる。因に「みんぶし」の名は「耳形のふし」の謂であらうか。

は ん 榛 (樺木科)

Alnus japonica SIEB. et ZUCC.

「はん」は、また「はり」とも言ひ、上代、その音を充当して「波里」とも「針」とも書いてゐる。植物名としては「はんのき」「はりのき」「ねばりはんのき」等異名が多い。

第二十五例



KURONEZU-IRO

第二十六例



KABA-IRO

山野、殊に水辺によく生育する落葉喬木で、高さ五六丈に達し、樹皮は帯緑褐黒色、長い縦の裂目があり、葉は互生、卵状、又は楕円長楕円のものがあり、縁辺に浅い鋸歯がある。早春、房のやうな単性の花を開く、雄花は下垂し、雌花は球状に相集つて上向する。花の色は暗紫褐色、春昼にその花粉が散つて赤褐色に煙るのを見て、楊柳(五十四頁、やなぎ参照)の花粉の青く煙るに対してこれを「赤楊」(あかやなぎ)とも言ふ。

この堅果は、松毬に似てやゝ小さく長円で、多数の鱗片を瓦状に列べてゐる。種子は扁平で軽く飛ぶ。

染用になるのは、その堅果で、おそらくは「椽」(つるぼく、ぬぎ参照)と共に最も古くから用ひられた植物性の黒系統の染料であつ

たらう。勿論その出發は「黒灰摺」で、後、これに含有される特殊タンニンを煎出、浸染して染着する手法に到着したものだ。

「衣服令」には「葵」(はりぞめ)とあり、「摺衣」(すりころも)の次、「柴」(しばぞめ)の上位にある。これは、すでに摺染による黒灰色ではなく、灰汁によって発色した赤黒褐色の色相であつたらうと思はれる。東歌(万葉巻、十巻四)の「伊香保呂のそひの波里原わが衣」(きぬ)につきよらしもよたへとおもへば」の妙なる色をなしてゐたのだらう。尚この「波里」を「萩」とし、萩の摺染とする説もあるが染色上から見ても「榛」でなければならぬ。

染用には、晩秋、初冬、樹幹が春に向ふ用意をなし終つた頃、その太い樹枝又は樹幹の一部を伐つて、雨に濡れないやうに貯蔵し、後これを細断してよく日光に当て、これを貯蔵するのである。煎法(六十八頁、ぬぎ参照)は「くぬぎ」の類と同様である。

第二十五例は鉄漿による発色の黒鼠色。第二十六例に消石灰と交染した発色による、赤褐色例である。



HAN (black alder)

ざくろ 柘榴 (安柘榴科)

Punica Granatum L.

「ざくろ」は、南欧の原産で、多く庭園に栽植される落葉小喬木。樹高、一丈余に達し、樹皮は暗灰褐色で枝には刺があり、若葉は赤色である。葉は長楕円形で光沢がある。梅雨の頃、枝梢に赤黄色の筒状の萼と、紅色の花弁をつけた麗花を開く。

果実は球形、熟すれば裂開して、紅玉の如き輝く多数の種子を露出する。種類

＊ざくろの花



ZAKURO (Pomegranate)

は花柘榴と実柘榴の二種、また甘、酸の二種がある。わが国に伝来した年代は詳かではないが当初は薬用が目的であったらしく、文献に見え始めたのは〔類聚雑

要抄〕(保延元年、一一三七)で觀賞用に用ひられた最初の文献は〔尺素往来〕。

果実は食用、果皮及び花は薬用として痢病に効があり、根皮の煎汁は瘰癧驅除に用ひられてゐる。

染用もまたその果皮の利用で、これは或は薬用としての煎汁があまりにも濃い黄褐色を出す所から考究された活用かも知れないのである。

染料としては、その果皮を(食用にした後でもよい)収集し、これを日光下に乾燥し、細断して收藏して置くのである。即ち、これをよく煎出したその濃液で、被染物を浸染し、灰汁、または明礬で発色すると、それぞれに、黄色乃至黄褐色(第二十七例)の色相を染出し、また、これを鉄漿による発色を行へば、容易に「楊梅染」に似た茶褐色となり、更にこれを灰汁の発色浴の中に移せば、第二十八例の紫紺色の如きを染めるものである。尚、「びんらうじ」(三十五頁参照)の「黒染」には必要欠くべからざる色料をこれが含有するものらしい。

くろなま
紅や石榴の皮の厚きにも (嘯山)



ざくろ
ZAKURO (Fruite)



SIKATU-SHOKU



TAMAGO-IRO

第二十七例

第二十八例

びんらうじ 檳榔子 (棕櫚科)

Areca Catechu L.

「びんらうじ」は、棕櫚に似た熱帯原産の植物で、直立して枝なく、樹高四、五丈に及び、葉は羽状複葉で、長さ四尺乃至六尺に達し

第二十九例



第三十例



AMEIRO

SEPIA

葉柄も四、五尺余あり、すべて叢生し、葉の裂片は棕櫚にくらべてその先端がひどく尖つてゐる。花は単性、平滑な花弁を附けて葉腋から抽きいで、花枝の上部に分枝して、多数の微細な雄花をむらがらし、その下部に雌花を置いてゐる。これが結実すると大さ一寸余の卵形をした橙黄色、或は深紅色の果実をつける。一本の木からその果実が毎年三百個位採取されて、薬用として今も漢薬舗に売られてゐる。古来薬用とされたのは、その果実で、これに染めて、所謂「檳榔子染」といふ紫気のある黒染を染めてゐる。

染法は、果実を割って皮部を去り内実を細く砕いて熱煎する。そして、濃い染液を煎出し、これに浸染を行ふのである。



BINROZI (Palm-tree)

かくて、この被染物を明礬で発色すると、第二十九例の紅黄褐色の色相を染出し、この染色に鉄漿を使用すれば、紫褐色、第三十例の色相を染出するのである。

尚、昔時の「檳榔子染」と称する黒染は、まづ「藍」で下染を行ひ、後、これの濃液に石榴の煎液を加へて浸染、更に、鉄漿を以って発色したもの。褪色して、所謂羊羹色と称されたのがそれである。さう言へば、南洋の土人が、この実を噛み、また石灰を噛んで、口中を赤く、齒を黒くしてゐるのも、言つて見れば一種の染色応用か。幹材は黒褐色、堅く建材として、調度材として昔から舶載され、果実も渡来したが、今日は薬用以外、染用としては全く廃絶した。

＊ びんらうじ (荖葉)



う　こ　ん

鬱　金　（茗荷科）

Curcuma longa L.

「うこん」は一名「きぞめぐさ」といはいはれ、亜細亜熱帯地方を通じて栽培せらるゝ高さ四、五尺の多年生草木で、本邦でも温暖な地には生育する。根茎は生姜に似て深黄色を帯び、葉は根茎より四、五葉を抽いて叢生、長さ二尺許、長柄を有し闊披針形で芭蕉の葉に似てゐる。夏秋の頃葉叢の中心より花穂を抽き、茗荷の花に似て、卵形の苞が多数、白く鱗次して尺余の長さになり、頂部は微紅色を帯びてゐる。苞の内に黄色の唇瓣を漸次に開く。

染料として所用されたのは、天平期に薬用として早く利用されたのに遅れ、平安中期の頃からだらうと言はれ、支子に交代して「紅花染」の緋染の下染に使用されてゐる。即ち、この根茎を粉碎した、深黄色の粉末の所謂「鬱金粉」（うこんこ）を、水又は温湯の中に溶解して、染色に入るのである。

その第三十一例は、灰汁、石灰溶液（上すみ）及び梅酸（六十四頁参照）の、その一つを以て発色したもので、多少の色差はあれ、各々に美しい黄色を染める。

尚、稀薄な鉄漿を通じ、更に石灰による発色を行ふと第三十二例

の黄金色乃至金茶色となり、また鉄発色を深度に行へば所謂「大島の赤褐の色相を現はすのである。

第三十三例の緋色——もみ色は、この鬱金を下染として紅花を染めたもので、まづ、梅酸或はクエン酸（頁六十四）で黄色に発色してから紅の染料を吸収させるのである。尚、この場合の下染用には支子（くちなし）をも利用する。共に酸発色によって美しい黄色を容易に染め得るからである。

染料としては根茎のまゝのものもあり、鬱金粉として市頒されてゐるものもあるが、（根茎のまゝのものは、なるべく小さく破碎し

＊　う　こ　ん（茗荷）



UKON (turmeric)

てから熱煎する）浸染するに当って、兎角この染材は染めムラを生じやすいので注意を要する。その粘着度もやゝ粗い粉末だからで、よくよくムラなく染めつけるべきである。

尚、この発色はアルカリには赤褐色となり、また「鉄」には黒ずんだ不安定な黄色の色相を現じて見せる。しかし、これは遂に乾燥しては美しい金色、または赤褐となるのである。所謂「濡れ色と乾いた色とは違ふ」といふ一例である。——これを予想して染めるのは永年の経験によるものだ。

＊ うこんの根茎



UKON (Root)

さう言へば、その利用が、支子、黄膚にはやゝ遅れたとあつても一般衣料としての使用には非常な愛着を以て用ひられたらしいのである。

勿論これは中世以来明治末位までのことではあるが、「うこん」と言へば、即ち「きいろ」の総称色名のやうでさへあったのである。あだかも、上代の「あかね」が赤色の色目の総称だったのと軌を一にして、庶民の中に木綿布にあかねもめん、うこんもめんの名を称し——あかねの禪、うこんの産衣うぶぎの名をなし



第三十三例



第三十二例



第三十一例

HI-IRO

KIN-IRO

KIIRO

たのである。

尚、これは本紅染の産衣の薬効を讃ずるに従つて、この鬱金染の産衣にも同様の効用をよせたのである。「うこんのおむつ」さへがそこに行はれた。

色も美しいからであつたらう。謂つて見れば、「鬱金うこんの美酒」は中華の詩に見え、「本草綱目」にも、支那に於て、婦人の衣を染めると書いてある。

本黄八丈の「黄」には刈安(二十六頁参照)を使用してゐたが、私共の草木染では、この黄色をも現に利用してゐる。但し、これは当初に於て、やや褪色するので(よい意味の変化ではあるが)はじめ、やゝ強目に染色する必要がある。

芭蕉にも思はせぶりの鬱金うこんかな

(鬼貫)



つきぐさ 鴨頭草 (鴨頭草科)

Commelina Communis L.

別名「つゆくさ」、他に「あゑばな」「はたるぐさ」「はなだぐさ」「うつしばな」ともよばれてゐる。原野、路傍に自生する一年生草本で、高さ尺余、節があつて地に臥す癖がある。葉は竹の葉に似て「竹青」の異名もある。卵状被針形で、互生、葉上に並行脈あり、夏、梢頭の編笠の形をした苞の間に、鮮藍色の二弁花を開くのである。その名の「月草」は、その花が月影に咲き出るといふのであり、「露草」もそれをいふのだらう。

第三十四例



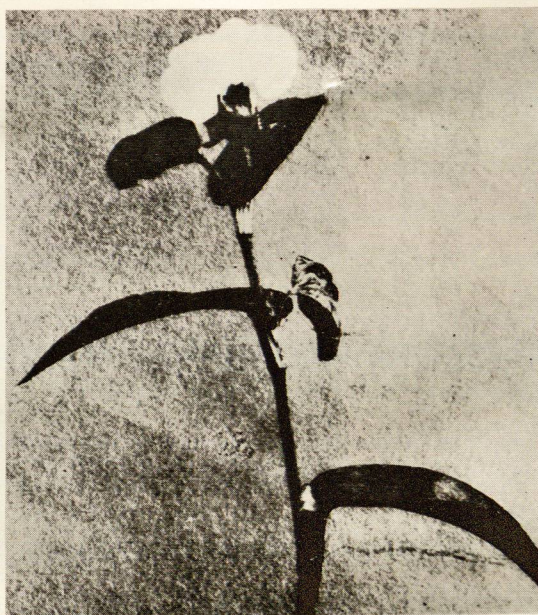
HANA-IRO

染料とされたのは、その花卉で、往昔、この花の紫——青を「摺染」したことにあつたのである。原始染色の摺花、即ち「うつし花」であり、また「はないろ」(第三十例)とよばれる青藍色乃至浅黄色が「花の色」とされた所であらう。「はなだぐさ」もまたその色の縹色からで、「あゑばな」は藍色で、これは現在も「青花」とよんで、この花から搾取した液汁を紙に浸染して「青花紙」と称し、友禅又は絞染の下図の顔料として実用してゐる。これは日光に強く、水洗に弱いその質を活用するの

だが、その性は本来の染色料としては、「鴨頭草に衣いろどり摺らめどもうつらふ色といふが苦しさ」(万葉巻七)と、漸く不適を知られて、遂に廃絶して仕舞つたのである。

図版は江州産の「おほぼうしばな」で、友禅染色の需用から、花卉の大きい品種が作られたもの。

＊ おほぼうしばな



TSUKIGUSA

＊ 月草は露草也。万の花は朝日影にこそ咲くを此の花は月影に咲けば月草といふなり。

「仙覚抄」

月草に衣ぞ染むる君がためいろどり衣摺らむとおもひて

月草に衣は摺らむ朝露にぬれて後にはうつろひぬとも

うち日さす宮にはあれど鴨頭草の移らふころ吾が思はなくに

万葉集巻七

同巻七

同巻十二

やまもも 楊梅 しぶき (楊梅科)

Myrica rubra SIEB. et ZUCC.

「やまもも」の別名「しぶき」は「やまもも」即ち「楊梅皮」の呼び名のやうでさへある。近古、所謂紺屋染の染料の中で青茶色を染め、また矢車や五倍子を併用して黒染をするのに、最も重んじられたものだが、その染色の際に、濃度を試みる舌端に楊梅皮の特殊タンニンの苦渋の味が、遂に「しぶき」(渋木)の渾名を生んだとも言はれる。また時に「桃皮」(ももかは)とも言はれるが、これは

第三十五例



AOCHAIRO

第三十六例



RENGAIRO

薔薇科の「桃」または「杏」の皮ではなく(第四十六頁「うめ」参照)やはり、楊梅皮で——これをアルカリで操作した、赤褐色を染める染料のことである。

この植物は、温暖地に自生する常緑喬木で、樹高は二、三丈にも達し、幹の直径三尺に及ぶ大樹もある。

染材は、その樹皮を剥いで、よく日に乾して、貯蔵したもの。嘉



＊楊梅樹

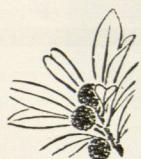
YAMAMOMO

して矢車又は五倍子と併用し、黒を染めるのである。

第三十五例は、「おはぐろ」(鉄漿)で発色した青茶。第三十六例は蘇枋と交染したレンガ色である。

やまももの実

やまももの色に染みたる木升かな (ひき女)



YAMAMOMO (Fruit)

永六新新版の「染物早指南」には「桃皮。楊梅の皮なり、うち砕き細かにして煎じ詰ておく」とある。

「紺屋口伝」には「常磐黒は下染め瑠璃花色にして(二十一頁「ある」参照)生附子すくなく桃皮第一につかふ。色変らざる故、ときはぐろ」とあり、藍の下染を

はまなし (薔薇科)

浜梨

Rosa rugosa THUNB.

「はまなし」は北国地方の多く海浜に自生する、落葉小灌木で、その南限は西海岸では鳥取県、東海岸では次城県である。京都辺地では「はまたちばな」ともいふ。

東北地方では「はまなす」と言ひ、この呼称が広がってゐるが、これは「し」を「す」と訛ったもので、もとバラ科のもので、果実もまたその科のものであり、牧野博士によって「はまなし」(浜梨)とした。

枝幹には刺があり、葉は羽状複葉、縁に鋸齒あり、上面深緑で皺をなし、下面は淡緑で柔い毛を密生してゐる。幹材の高さは二、三尺。六・七月の交、枝梢に薔薇によく似た紅色の麗しい芳香ある

第三十七例



TOBI-IRO

花を開く。白色、また八重咲の栽培種もある。花後、扁円形 of 多肉の緑色の果を結び、初秋より紅熟、生食し、またジャムにもする。花からは香水をとる。

染用されるのはその根部で、砂中深く伸長してゐる部分を、早春芽吹き前に採取、心根を抜き、表皮のみを乾燥し收藏するのであり、これを熱煎染用する。



米はまなしの花

HAMANASHI (Flower)

このタンニン含有量は十八%位である。

染色は、この乾燥根を熱煎し、よく染着を行ひ、石灰溶液また鉄漿水にて交染、(六十六頁参照)第三十七例の色相に至る。鳶色であり、秋田八丈を染めた。所謂「鳶八丈」である。

はまなしや砂の小山の影丸く (文方)



HAMANASHI

い ち ゐ 一 位 (松杉科)

Taxus cuspidata Sieb. et Zucc.

「いちゐ」は別名「あららぎ」「おんこ」といふ。いちゐといふのは、この材を以て「笏^{しやく}」を作るに用ゐるので、これに「一位」の位をよせたのだといふ。またその材が紅いので、狸々木といひ、尚、「すはうのき」とも言ふのは、蘇枋の紅を染める様に、これを染材としてやゝ赤き色相を染めることが出来たからであらう。

溪山に自生する常緑の喬木で、高さ四・五丈に及ぶものもある。葉は縦に似て細長く先尖り、二列に羽状をして並んでゐる。雌雄異株、雄花は四月

に、葉腋に
緑褐色、雌
花は葉腋に
独生、はじ
め緑色に後
紅色肉質内
に緑色の核
種を蔵する
のである。
九月には



ITII (Yew-tree)

成熟して赤く、味甘く食用になる。

第三十八例

染色は、この心材の紅い部分を細末にして煎出し、明礬又は灰汁で発色して、第三十八例の淡紅色乃至薄牡丹色を染出す。

印度産で、Redsandal-wood と称され

て赤葡萄酒の色附に用ひ、また「紅木」

(こうき) と俗称されて、立三味線の棹材として珍重されるのもこの一種である。

(この紅木については、小野蘭山は「木紅」を倒せば紅木だと言っているが、この木紅は蘇枋を言っていたらしい。)

紫檀^{したん}、黒檀^{くくたん}、タガヤサン、ビンラウ等、これは建築、木工に対する用材として、しきりに舶載され、蘇枋も、この紅木も同時に運ばれたらしい。(蘇枋を以て本箱の蓋のツマミを造ってゐるものもあった。)

また一般建築用材として、一位細工として、その堅緻な材質とその膚色の美しさを賞用されてゐる。飛弾春慶の本地もまたこれで作られる。尚、北海道では、オンコといひ、アイヌの木工、民芸品を作っている、熊彫は有名である。

尚、一位材は、江戸時代には住宅用建材の中に、この一木の使用を欠くことはならないとされてゐたといふ。魔除け、雷除けの材とされたからである。



HADA-IRO



くるみ 胡桃 (胡桃科)

Juglans Sieboldiana MAXIM.

「くるみ」の内、染用に供される「おにぐるみ」は、山野に自生する落葉喬木で、樹高四・五丈に達す。葉は羽状複生、四乃至十対の小葉になり、縁辺に鋸齒、両面に毛あり。雌雄同株で、六月頃穂状の花を垂らす。雄花は腋生し、長さ五、六寸で綠色、雌花は頂生して直立、稍帶赤色の花柱をもつてゐる。花後、綠色多肉の果皮に被はれた核果様の仮果を結び、十月成果する。堅果は球形で先端が尖り、皺があり極めて堅い、食用になる。

染料となる部分は、その核果を包んでゐる緑色の外果皮を第一とし、次で、樹皮、根皮をも利用する。

第三十九例



EBICHA-IRO

「胡桃染」の文献はかなりに古く、天平の頃に既に「呉桃染」が現れてゐるが、これは、黒灰摺によるものらしく、後、煎汁による染色に進み、「本草綱目」の「胡桃青皮、染三髭及帛紫黒」に到つたのであらう。かくて、鉄漿又は木醋酸鉄で発色すると、紫灰色を染出し、更に後には消石灰の薄溶液で発色する手法を以て、紅紫黒色の所謂「海老茶色」の、作例

「第三十九例」

の色相を染めて、赤系統の乏しい田園の間に賞用されたのである。

染材を收藏

するには、秋盡、胡桃の実を收穫する時青い果皮のままに臼に入れて軽く搗き、

真黄色の液汁をにじました果皮を、堅いくるみと分離して、その果皮のみを乾燥保存するので、それは乾くに從つて黒色に変じて萎縮するものである。

染色にあたつては、まつこの果皮を軽く水洗して、それを熱煎して濃い煎液を作るのである。

尚、この果皮の黄色い液汁は、そのまゝ塗布して、皮膚病の所謂「なまづ」を治す効があるといふ。

雨ばれや枝に汗かく生胡桃 (如在)



KURUMI (Walnut)

＊くるみ

くり 栗 (穀斗科)

Castanea Crenata SIEB. et ZUCC.

山野に自生する落葉喬木、葉は披針形で鋸歯がある。梅雨の頃に単性の花を開く。雄花は長く穂状をなし、雌花は穀斗の中に被包されてゐる。秋、熟して栗となることはよく知られてゐる。

染用に供されるのは、その果皮、果殻、又樹皮の中に含有されてゐるタンニンを利用するのであって、果皮は食用後澱粉質部を洗って貯蔵し、殻は

＊くりの実



KURI (Chestnut)

脱落直後、樹皮は落葉後に剥いで乾燥收藏し置くのである。

尚、本所はその雄花の落花を利用することに成功してゐる。「染草になるてふ栗の落ち花を待つ心にて庭掃き清む」。



＊くりの花

KURI (Flower)

これはその染色に心怡しむ一女性の歌であつた。

〔和名抄〕には「久利」と訓じ、〔大和本

草〕には「くり」は「くろ」なりといひ、果皮の色黒きが故にかく名づけたりとあるが、これは寧ろその果皮、果殻で黒灰摺し、或は後にその煎汁を鉄気土質によって発色して、黒染をした事に「くろ」の名を受取つたのだと思はれる。しかも、古伝に「𪛗ハ涅色ニテ深黒ニ非ズ」とある様に「はん」「くぬぎ」と共に「衣服令」の柴染の内に類属されるもので、まづ鉄漿発色で第四十例の鼠色乃至紫黒褐色を染め、後年、更に、これに灰汁を加へて発色した第四十一例の、所謂「栗皮茶」を染色したものであらう。

尚、雄花による染色は、やゝ紅味を帯びた褐色である。



KURIKAWA-IRO

第四十一例



NEZUMI-IRO

第四十例

やまうるし 山漆 (漆樹科)

Rhus trichocarpa MiQ.

「やまうるし」は、山林中に自生する落葉亜喬木で、又「やまはじ」といひ、樹高丈余、殆ど「漆樹」と大差ないが、たゞ、小葉の縁辺に多少の鋸歯を有するものがあるのと、核果は平滑でなく淡黄色の剛毛を有すること等の相違があるのみである。六七月頃、黄緑色の小花を、円錐状花序に綴る。核果は小扁球形で硬毛を密生してゐる。葉は一種のタンニン酸を多量に含有するので、染色用及び製鞣用に供せられる。(月明紙では茶色を染めてゐる。)

第四十二例



KURO-NEZU

染用としての樹葉を採收する時期は、

晩秋その葉が美しい紅葉、黄葉を示す時で「山藍」また「蓼藍」に於けるが如く日光を感得し易い上葉程色素の含有量が多いので、日当りのよい日向山に成育したものを收用し、その葉を乾燥して貯蔵するのである。染方は先づこの乾葉を細断し、鉄分なき鍋に入れ熱湯を注ぎ、強

第四十三例



KURO-IRO

い火力で煎汁を作り、第一液をとり、更に第二液をとって混淆し、鉄で発色すれば紫気を含んだ黒鼠の色(第四十二例)を染出するのである。また、これを灰汁媒染をすると鼠気のある白茶様の色相を示すが、元来これは黒色染料として用途されたので、往古は「つるばみ」に属するとして櫟、柴染の中に大別されてゐたものだらう。本研究所は、この濃煎液で「漆黒」を染めることに成功している。古伝「藍下」(あゐした)または「紅下」(べにした)の法である。被染物を先づ藍甕の中に染めて、「浅黄」に下染してから、この「山漆」を上染めるのである。(紅下の場合は、紅染で下染するのである)これは古法として強堅な黒染とされてゐる。尚、山漆は「うるし」とは異質で、所謂「かぶれ」をしない。

米やまうるしの葉



YAMAURUSI (Leaf)

かいだう 海棠 (薔薇科)

Malus Halliana.

観賞樹として、その麗美を知られてゐる。高さ丈余に達する落葉木で、葉は長楕円で先端尖る。春四月、新葉の中に長い花梗を垂れて、紅色艶麗な花を開く、蕾は赤く、やがて半紅、半白の花となる。染料するのはその樹皮で、枝を剥皮乾燥して收藏。熱煎してこの染液をつくる。伝承されたものではないが本研究所の実用した褐色料である。発色剤は鉄漿及び石灰(四十頁「はまなし」参照)である。(第四十四例)



KAIDO (aronia)

こなし 小梨 (薔薇科)

Malus Sieboldii REHD.

「こなし」は一名「ずみ」また「みやまいだう」ともいふ。山野に自生する落葉性灌木で、幹は五・六尺より二・三丈に及ぶ。海棠の一種で、春、寸余の花梗を出し、五弁花を満開、花後小さい球状の実をつける。熟して赤色或は黄色となって秋日をその梢頭に飾る。「上高地」のキャンプ場「小梨平」は有名である。

染料として利用される部分は、その灰褐色の樹皮で、乾燥收藏したものを細断、熱煎して染用に入る。



第四十四例

KOGECHA



KONASHI

う

め

梅

(薔薇科)

Prunus Mume SIEB. et ZUCC.

「うめ」は「和名抄」に「宇女」、「本草和名」に「牟女」と訓ずるもので、古歌に「にほひぐさ」「かぜまちぐさ」「かとりぐさ」等と詠まれ、万葉集以来しばしば歌はれてゐる落葉喬木で、古来観賞用として栽培されてゐた。

染用利用される部分は、その樹幹で、濃色を求めるにはその中心質の淡紅色を帯ぶる部分がよい。従つて白梅よりも紅梅がより多く濃色を染色し得るが、美しい白茶の色相を染めるには、また白梅の清楚に頼るべきであらう。

「梅染」は、これを以て厳冬を凌ぐといふ特殊のタンニン質を、即ち染色に利用したもので、それを灰汁、または石灰水、或は明礬溶液で発色（六十八頁「染色」参照）すると、淡紅乃至赤褐色の色相を発し、もし鉄漿発色によれば、第四十五例の鼠色、所謂「梅鼠」を染出す。第四十六例は、石灰水液で発色した「クリーム」である。

然し、古来清香を知られてゐる植物も、染色としては、上代には見当たらない様で、恐らく徳川期以来の染法らしく、尚、同一科類である「桃」「杏」の樹幹、「山桜」（四十七頁写真参照）の樹皮、枝幹等

もこれに相似した色相を染める。

貝原益軒の「鄙事記」には「梅の木を細かに打割りて水にて煎じ、布一端には水三升程入れ二升二合程に煎じ、早稲藁を黒焼にして、右の煎じ汁三四遍注ぎ、其灰汁にて三遍染める。若し淡染にせば右の灰汁に数遍染めて色善き時其上を薄渋にて二三遍染めれば褪げず」



UME (Plum-tree)

米
う

め

46

(五十七頁) 補遺参照) とあって、灰汁発色であり、「手染重宝記」では「手盥へ水一杯入、石灰水一合程入かき廻し、むらなく手早く染め、能く濯ぎ」とあって、石灰媒染の手法を見せて居る。

山桜(やまざくら)は、同じ薔薇科で(左図参照)花は葉と共に生じ、その花梗の平滑を異とする。山地に自生するものが多い。染用には、この樹皮を主とする。噛んで涼しい苦味を感じるのはその特殊タンニンによるのである。梅よりも、やや紅褐色を帯びるものである。

尚「紅」^{べに}の発色に欠くことの出来ない酸(クエン酸)としてこの梅の実の黒焼——烏梅^(六十四頁「うめず」参照)は大切であり、むかしから知られてゐる。京都の紅染の為に、大和月ヶ瀬の梅林が出来たと言はれてゐる程である。



＊やまざくら

YAMAZAKURA wild cherry (Trunk, bark)



第四十六例

KŌ-IRO



第四十五例

UMENEZU

梅

紅梅の紅の通へる幹ならむ

虚子

薬園の草に落ちたる実梅哉

月斗

梅の花今盛りなり百鳥^{ももどり}の声の恋しき^{こほ}春来るらし

万葉集卷八

桜

この花のひと辨^よのうちに百種^{ももくさ}の言ぞこもれるおほろかにすな

万葉集卷八

山桜皮を剥れて咲きにけり

一茶

鶏の声も聞ゆる山桜

凡兆



うめ

たまくす

玉楠

(樟科)

Machilus Thunbergii.

「たぶのき」一名「いぬぐす」とも言ひ、暖地に自生する常緑の喬木で、高さは四十尺にも達する。葉は長倒卵形、又は長楕円形で厚く、光沢がある。秋、淡緑色の小花を開き、果実は球形で、翌年に至って紫黒色となる。材は樟材に似て一層堅緻、老幹では環状の雲紋をなすので

古来「たまくす」と呼ばれた。觀賞用として栽培され、老樹を愛されてゐる。



TAMAKUSU (Trunk • bark)

* たまくすの樹葉

染用に供するのは、その樹皮で、厚質のその皮部には特殊のタンニン質が含まれてゐる。鉄及び石灰によ

第四十七例



TOBI-IRO

って発色して、赤褐色の所謂「鳶色」(とびいろ)を染める。島八丈の鳶色は古來これで染めたもので、かりやす(二十六頁参照)の黄と併用されて「黄八丈」また「鳶八丈」に常用されてゐた。暖地ではこれを使用する(寒地では「はまなし」(四十頁参照)の鳶色染料を使用する)。また、漁具の魚網をも染める、そのために強靱になるからである。

鳶色(赤褐色乃至紫赤褐色)の染材として、玉楠が用ひられたのは、比較的暖地の伝承だらう。これが樹皮で、また樹幹で、(多少の色相の差異はあるにしても)共に染められることは有難い。生育地としての北限は、横浜あたりらしいが、(鎌倉には多い。伊豆では「たぶのき」と言つてゐる。)しかし一般染用にはあまり利用してゐない。

これは赤褐の染料として、利用すべきだらう。

もっこくの落葉掃きたる茶の日哉 (子規)



TAMAKUSU

も っ こ く

木 斛 (山茶科)

Ternstroemia japonica.



MOKKOKU (Scarlet-secb)

米

常緑の喬木。その深緑の姿体を愛されて庭園に植栽されてゐる。高さは一丈内外、二丈に達するものもある。葉は長楕円形、質厚く光沢がある。七月頃白色五弁の長梗花を枝上に開く。果実は直径三四分の球状で、熟せば紅い実を吐く。「あかみのき」の別名がある。染用するのは樹皮で、剥皮乾燥して、煎液を作る。幹材も使用するが、やや淡白である。

米もっこく

るが、や

や淡白で

第四十

八例はそ

の鉄・石

灰液の発

色によつ

たもので

ある。

しゃりんばい

浜木斛

(薔薇科)

Rhaphio Zepis umbellata.



KABA-IRO

海辺に自生する常緑の灌木で、浜木斛(はまもっこく)ともいふ。葉は楕円形、もっこくに似てより厚味がある。莖高は三尺乃至五・六尺に達するものがあるが、地に匍伏する性がある。海風にも堪へる所以だらう。夏、梢上に円錐花序をなして梅花に似た小形の白い五弁の花を咲かす。実は小楕円形の黒色。病葉は黄、また赤く美しい。琉球染色ではこの樹皮を重用してゐる。紅褐を染める——もっこくと同じく鉄漿及び石灰液で発色する。

第四十八例



SHARINVAI

そ よ ご 冬 青 (冬青科)

Ilex pedunculosa MIQ.



SOYOGO (Ramification)

山地に自生する常緑喬木で、葉は長楕円形で尖り、葉柄やや長く（この小枝を揺ると、さやさやと鳴る。さやさや木ともいふ地方がある）互生で、質は椿に似て、少し薄い厚さである。花期は五月、白色の小花で実は核果小豆大で長い柄があり赤色に熟して、美しい。社地に植ゑて神木としてゐるものもある。

「大和本草批正」には「ふくら、ふくらもち即ち冬青なり。さやごととも言ふ。この葉にて布帛を染む、色赤し、さやご染と言ふ」とあり、また「中陵漫録」には「信濃方言染用木、また染木ともいふ」とある。信濃では、葉を晩秋初冬の間に採って、生葉を臼に搗き甕に入れ、水を注いで日光にあて、五・六日してその水で染め、明礬で発色する。交染四・五度で、淡紅色よりやや渋味の紅色を染める。（二十三頁「やまある」参照）尚、この樹の灰も椿灰に準ずるものである。

ち や 茶 (山茶科)

Thea sinensis L.

や、温暖な各地に栽培される常緑の小さい灌木で、葉は濃緑色で質厚く光沢がある。初夏、この若葉を摘んで緑茶や、紅茶を製することは知られてゐる。

染材となるのはこの葉に含まれてゐるタンニンで、煎茶は一二％番茶は八％、紅茶七、三％を含んでゐる。茶畑で枯れ落ちる廃物でもよく、また「出がらし」を乾燥したものでもよい。

染液は、鉄分のない鍋で、強い火力で煎じて濃い液を作る。この染色による色相は「さくろ」（三十四頁参照）の鉄漿による発色に近い褐色である。（念のために言へば、所謂「茶色」とは、煎茶また番茶の色をいふので、茶を染料にした染色の色相ではない。）



CHA (Tea-tree)

は
じ

黄蘗漆 (漆科)

Rhus Succedanea L.

山野に自生する落葉の喬木で、高さ二、三十尺、葉は羽状複生、五、六月の頃黄緑色の円錐形の花をつける。夏から病葉に始まる蘗もみぢは、緑葉の中に紅をちりばめて美しい。秋には一樹真紅となる。



HAGI (Redlac-Sumach)

〔和名抄〕には「波爾志」又は「波志」とあって、深黄色の材質を煎じ出し、至上の御袍を染めた。〔縫殿寮式〕によると「綾一正に蘗十四斤、蘇枋十一斤、酢二升、灰三斗」とあり、色「赤黄色、如三日暉」と註してある。――「黄蘗染」(くわうろぜん)である。

この染色に於いては、蘇枋(六頁参照)との交染といふより、蘗と蘇枋との煎出液をまづ合一してその液で浸染する(六十六頁「染色」参照)尚、これは蠟燭の蠟を採取するために、古来林野に植栽された。

く
は
桑 (桑科)

Morus alba L. var. romana LODDI.

養蚕の飼料としての桑はよく知られてゐる。多年生の落葉の灌木で、葉は緑、深い切れ込みがある。春、淡黄色の単性の花を咲く、実は、所謂「みづ」といはれる紫黒色の楕円形のもの、甘く、食用になり、また桑酒を造る。

染料としては「衣服令」に「桑染」と見えてゐる。「桑ハ黄ニ並ビテ、緋、紅等に並バザレバ、淡黄ニ近キ」とあって、主として根皮の煎汁で発色して淡黄色を染めたのだらう。しかし、これの含有し

てゐる色素の量が少ないので後代全く顧られず、その根皮は「桑白皮」としてのみ薬用に残ってゐる。



KUWA (Mulber-Tree)

この色素はエーテル又はアルコールに溶解するので濃度の染汁の抽出される将来もあるだらう。



ゑんじゅ

槐

(豆科)

Sophora Japonica L.

かしは

櫟

(穀斗科)

Quercus dentata THUNB.

「ゑんじゅ」は落葉喬木で、大樹ともなる。葉は卵形乃至卵状被針形、羽状複生で互生。初夏、梢上に黄白色の蝶形の花冠を持つてゐる花房を垂れる。果実は、長い莢形で豆類に似てゐる。

幹材は堅緻で、褐黒色の条理を蔵し、雅致があるので建材として尊重される。殊に「槐」には大臣の称位がある。槐門の語もあり、従って「床の間」の用材として喜ばれる。実朝の「金槐」は鎌倉右大臣の意である。

その花を収用して灰汁、明礬で発色し黄青を染めた。

〔天工開物〕には

「花綻びて未だ開かざるものを槐蘂といふ。取る者木の下に竹籠を置き

て之を承け、水を以て煮て一沸して漉し、捏ねて餅と成す」とある。花

餅（十八頁）の類か。

山地に自生し、また園地に栽植される落葉喬木で、葉は倒卵長楕円形といふので大きく、長さ四・五寸以上のものもある。葉のへりには波状の大きい鋸歯があつて、短い葉柄で互生してゐる。四・五月頃新しい葉と共に房のやうな花を垂れる。実は堅果でその穀斗は浅くて碗状をしてゐる。この葉は「かしは餅」を包むので知られてゐる。染材となるのは、その新しい芽、樹皮及び穀斗で、これは「櫟」と同質の特殊タンニンを多量に含むので、上代すでに（つるはなぞめ）「櫟染」（二十八頁）「くぬぎ」（参照）に属し、黒灰摺に使用され、後、灰汁、鉄漿による発色により、白茶、鼠、殊には黒染の染料として使用されたのである。



KASHIWA (Mongolia-Oak.)

なんてん

南天

(小蘗科)

Nandina domestica THUNB.

常緑の灌木で、直生三・四尺、樹皮暗褐色の皺がある。葉は互生、卵状披針形の小さい葉が羽状に複生してゐる。白または淡紅のその花、その実の美しさはよく知られてゐる。実、殊に白い実は鎮咳薬となり、葉の搾汁は止血薬として利用されてゐる。

染料となるのは、内部黄色の茎幹の部分で、秋、結実以前に採伐して、すぐに刻んで乾燥して置くのだ。

染色は、これが含有してゐる特殊タンニンを煎出して、濃い煎汁



NANTEN (nandaina)

を作つて、浸染するのだが、「おはぐろ(鉄漿)」で「青気」の茶。灰汁、または石灰で発色すると、黄気の茶を染める。

しかし、黄系統の染料は多いので園芸種など除外してよいと思ふ。

れんげつつじ

(石楠科)

Rhododendron japonicum, Sieb.

俗に「鬼つつじ」とよばれてゐる。山野に自生する落葉の灌木で茎の高さ五・六尺に達し、葉は倒卵形又は披針形で纖毛状、鋸歯があり、まだらに毛茸を生じてゐる。花は大形で、総状で散形に排列し、色は黄赤色、又は黄色である。地方歌謡に「聞いて怖ろし見て美しや五月野に咲く鬼つつじ」と唄はれるのがこれである。

染用に供するのは、その樹葉で、これには多量の特殊タンニンを含有してゐるので、煎液をつくつて染用に入るのである。

発色剤はおはぐ

ろと石灰で、(六十

六頁「染色」参照) 前

者では黒鼠を、後

者では赤褐色を染

める。尚、染料と

しての樹葉の收藏

は晩秋の黄葉を時

期とする。古来、

山間に伝承された

手法である。



RENGETUTUGI (azalea)

いてふ

銀杏 (公孫樹科)

Ginkgo biloba L.



ICHÔ (Ginkgo)

*

いちよう

散る童男

童女ひざ

まづき

茅舎

一名「ぎんなん」(銀杏)又は「ちちのき」と言ひ、落葉喬木で

幹は長大、また周囲一丈に達することはよく知られてゐる。葉は扇形、葉面に多数の並行脈があり、表は緑、裏は淡緑、秋に黄色となつて散る。春、新しい葉と共に単性花をつけ、晩秋、黄色球状の実を結ぶ。実は核果で純白色、ぎんなんとよぶものである。

染料とされるのは、樹皮の肉皮で、これの外皮は厚く木栓層で、内皮は帯黄色である。往古、この内皮の煎汁で「白茶」を染めた。灰汁^{あく}の発色であつたらしい。石灰、又は明礬^{コルカ}とするもよいのであらう。

やなぎ

楊柳 (楊柳科)

Salix Subulnana, Bl. (うなぎやなぎ)



YANAGI (Willow)

山地、水辺に
自生する「やなぎ」も、染用に
される。山地の
「いはやなぎ」
「しばやなぎ」
水辺の「かはや
なぎ」「ねこや
なぎ」等々、観
賞的の「しだれ
やなぎ」も染ま
るのである。

楊柳の葉は、長楕円形、長短多種、辺縁には鋸歯があり、裏面灰色。

花は単性の穂状で、春日開花して、淡黄緑色の花粉を烟のやうに散じる。即ち「青楊」(あをやなぎ)である。「はん」(三十三頁参照)はその花粉が赤褐なので「赤楊」(あかやなぎ)ともいはれる。

染料となるのは、その樹皮で、秋冬の間に剥皮して乾燥し、收藏するのである。染色には熱煎、相当の濃液を得て浸染する。発色は石灰水液では褐色、鉄漿では青味の灰黒色を染着する。

いたやかへで

板屋楓 (楓科)

Acer pictum. Thunb.

「ときはかへで」又「つたもみち」とも別名される。山地に自生する落葉喬木で、高さ五・六丈に達し、幹は平滑、葉は五乃至七裂、緑青色で美しい。

染用利用されるのはその樹葉で、晩秋期に収用、乾燥して置く。手法はこれの煎液によって染色、鉄漿又石灰溶液を以て発色するのである。これまた、その含有する特殊タンニンの化学変化を利用したものである。



ITAYAKAEDE

その他、楓科のものすべてからも多少、色相の変化はあるが、勿論染まるわけだが、観賞用の「もみぢ」までを徴用すべきではあるまい。

＊

ぎしぎし

洪草 (蓼科)

Rumex japonicus. Meisn.

湿気の多い原野や、路傍に沢山ある。多年生の草本で、「馬のすいこ」とも謂はれてゐる。



GISHIGISHI

を高く抜いて、梢上に淡緑色の穂を繁らせる。

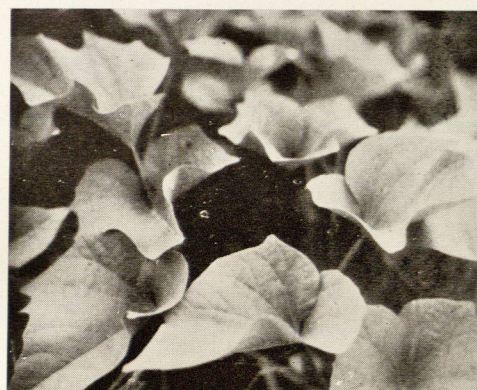
染用にする部分は、その黄ろい太い根で、晩秋より早春までの間に、根部を掘り採って乾燥、收藏して置き、熱煎してその液汁を利用するもので、その手法は簡単であり、また染材を収集することも容易であり、所謂無用の材でもあるので、本研究所ではその実用を奨励してゐる。(実は乾燥して枕に入れる)

色相は鮮黄色、主として石灰による発色を行ってゐる。

さつまいも

甘薯 (旋花科)

Ipomoea Batatas LAM. am var. edulis MAKINO



SATUMAIMO (Sweetpotato)

本研究所では、このタンニン質を含有してゐる茎葉を以て、染用に試みて成功したのである。

染材としては、夏秋の間、甘薯の收穫と同時に、その茎葉を採取し、細断して、よく表裏を日にさらして乾燥し、收藏する。

染色は「刈安」と同じく、よく、濃き煎汁を作つて被染物を浸染し、鉄漿（又は木柞酸鉄）で発色すれば、「しぶき」（三十九頁参照）に相似して「青菜色」のやゝ黄味あるものを染色し得るのである。

たまねぎ

(百合科)

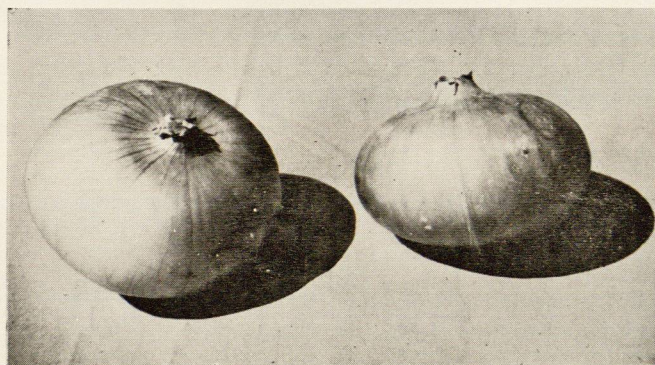
Allium bistourm, L.

蔬菜として知られてゐる「たまねぎ」の鱗茎の皮部、黄紅色の表皮を剥ぎ採つて染材とする。

この染色も、昭和七年、本研究所が試用してから行つてゐるもので、染材の收容も容易で、全くの廢品の利用であること、しかも手法も至つて簡単である点が共に大に結構である。しかも、色相はやや浅いと言つても地方染材として乏しい赤系統を染めることは珍重とすべきだ。

染材の収集は、食用の都度、又は收穫後（表皮の紅褐色を示した時）にこれを剝離し、よく乾燥して收藏するのである。

染法は、この染材を、厳に鉄気のない染用鍋にて熟煎、浸染をよくして、発色槽に入れるのである。明礬の発色で、紅褐色を染め得るものである。



TAMANEGI (Onion)

くろまめ

黒大豆 (荳科)

Glycine Soja BENTH. var SP.

「くろまめ」は黒色の、大豆の一種。畑に栽培される一年生の草本で、莖葉共に毛茸が有り、葉は互生、三葉より成る羽状複葉で、各小葉は卵円形をしてゐる。夏日、葉腋に褪紫色の蝶形花を咲かせ実は秋に成熟する。

染色は、黒色のその実を鉄分のない鍋に入れ、ひた／＼に水をそそいで熱煎すると、所謂チョコレート色を発するのである。

この液汁を以て被染物を浸染するとまづ紫褐色の色調を呈する。これを鉄漿によって発色すると、果然、一種の特殊なる青鼠に変化して、所伝される「銀鼠」を染めるのである。即ち、第四十九例の色相である。「染物重宝記」に「極上紺は藍を染抜き、下紺は黒豆を使ふ」とあり、徳川中期より、農村山間の常用とされてゐた。

第四十九例



GIN-NEZU

尚、民間に伝承されてゐるものに「小豆」(あづき)がある。人も知る豆科の一種で、その果皮の色はやや紫気をふくんだ赤色で、所謂「あづきいろ」の色相である。しかし、染用としては、黒豆と同じく、鼠系の染色をなすのである。



米くろまめ

KUROMAME

かきしぶ

(渋柿)

Astringent

これは、所謂「草木染」の染材とは異り、古来別箇の染法を以て主として補強用にご利用され、魚網麻囊を染め、また紙類にも用ひて持久力を与へてゐる。色相は淡色では白茶、濃色では暗赤褐色をなすものである。「しぶ色」といふ。

主として「やまがき」(一名、しなのがき)小柿ともいふ類の柿の実のタンニン質を搾出した液汁——シブといふを材としてゐる。

糸又布を染めるには、その搾汁を水一斗に茶碗一杯の割に和し、この中に浸染し、しばらく戸外にて乾すのである。(一夜間戸外にて、所謂夜露にさらす、特有する臭気を消すためである。)

げんのしようこ

(牻牛児科)

Geranium Nepalense SWEET

「げんのしようこ」は、別に「ふうろさう」(牻牛児)「みこしぐさ」とも言はれ、山野到るところに自生してゐる多年生の草本で、茎は地上に蔓状をして伏臥し、梅花に似た小さい花を開くので「うめづるさう」の異名もある。夏日、葉腋に白みのある莖色の花をつける。葉は掌状、主として三、五中裂、各裂片は菱形、辺縁に缺刻がある。その実の蒴は五心皮に分解する。

この染色は、その茎葉にタンニン質の含有が多いのを利用し、鉄漿で発色して、第五十例の鼠色、所謂チャコール・グレイを染め得るのであるが、これは古来の伝承ではなく、私の研究所が昭和当初に試みて成功し、今日にも重用してゐるもの。

第五十例



HAI-NEZU

尚、薬用には整腸薬として、痢病に特効があり、「現の証拠」と、その薬名を称されてゐる。



GENNOSHOKO

といふのであらう。

しかし、何にしても古来これが実用されて染色美を成したことは事実にて証されてゐる。殊に、有毒なものは、或は染色に堪へるものがあるても、これを伝承しなかつたらしいことは、日本草木染に見られる特色として讃じられるべき事実であらう。

明日の科学的攻究は、まづこゝから出発すべきだらう。

言つて見ればタンニンを含むものは、兎に角これによつて染用に供された風である。(実は、このタンニンといふものが——その内容が、いまだ本当には解明されてゐないのだとも聞く。)恐らく、その有り方と、その特殊性とが各種目に於て究められつくして居ない

あ く

灰汁

Aku.

〔万葉集卷十二〕に「紫は灰さすものぞ つばい市の やそのちまたにあへる児や誰」とあるは「紫草」による紫染に、灰汁をさし加へて美しい色相が染まることに言寄せた麗人讃詞であるが、古代、上代の染色に於てこの灰汁に示唆され、影響され、これを応用して来たらしいことは重大である。この紫染に使用される「椿灰」をはじめ「枳灰」「真木灰」「藁灰」「あかざの灰」、また南部紫根染に重用されてゐる「さはふたぎの灰」等々に到るまでの、この灰汁を紹介しての染法の発展にはまことに深大なる内容がある。

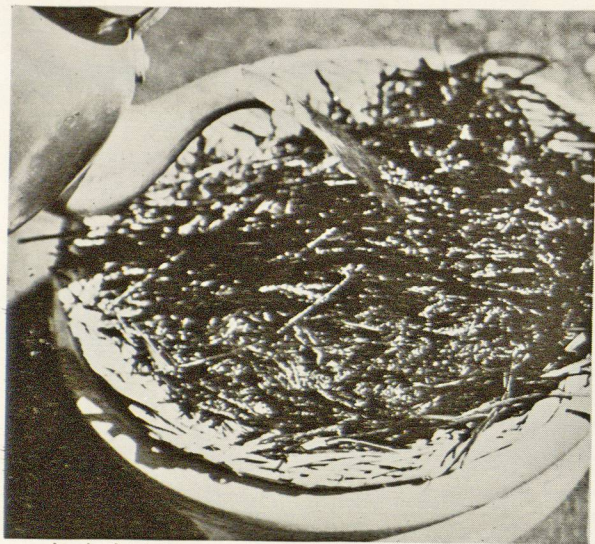
「色土摺」または「灰摺」「摺衣」の時代、即ち発色料を用ひずに染色を果してゐた時代、否、まだ麻布、白帛をそのまゝに纏つてゐた古代に於ても、これを晒し、これを洗ふためにこの灰汁は使途されてゐた。かくて、各雑色の染法は希求される所に発達して、漸く浸染法に到り着いたのであるが、これに際して、一例すれば「あかね」(十一頁)の如きが、その赤い根に、注意され、煎出されて紅黄の液汁となつた時、偶々、そこに常用されてゐる灰汁を受取つて美しい緋の色相を発色し、為にこれを発色に用途したといふ様な発見

があつたものであらう。

灰汁の製法は要するに木灰に熱湯をそゝぎ入れ、灰を溶して落ちる灰汁液を採る方法で、藁灰などを材料としてよく、第二法の木灰などには、灰を容器の中に置き、十倍の水をそゝいで攪拌し、上澄を採る簡単な方法がある。むかしは「灰汁桶」(あくおけ)といふのが台所の隅などに常置されて居り、この大桶の中に灰と水を入れ、装備した出口から灰汁を垂らしあつめて使用したのである。

「灰汁桶の滴くやみたりきりぎりす」といふ凡兆の句もある。

また、むらさき、あかね、べにばな等の発色に使用する場合に、



あくをとる

今日では「炭酸カリウム」Potassium Carbonate E. xtrapure [K_2CO_3] を利用するも良いだらう。たゞし純無機質であるためか、ためにいささか色相が違ふやうである。

むかしはさまざまの灰を売つた「灰問屋」があつた。

つばき

椿 (山茶科)

Camellia japonica L. var. *hortensis* MAKINO

常緑の灌木で、大樹二丈に達するものがある。葉は濃緑、質は厚く光沢があり、多肉な花の美しさで知られてゐる。秋末に暗褐色の種を吐く、棒油の原料となるものである。

上代にはこの青葉を摺染に用ひ、またその青汁で蚊帳を染めたと「染物重宝記」にもあるが、染色料としては軽んじられ、後亡びた。

しかし、古来、その樹葉を焼いて造った「椿灰」を重用したらしい。



TUBAKI (Camellia)

く、「万葉集卷十二」にも「紫は灰さすものぞ椿^イ市の、八十の衢に逢える児や誰」の相聞歌がある。

この灰は「山あく」

とも言ひ、紫根染、茜染の発色に必要とされてゐた。(六十六頁

「染色」参照)

ひさかき

枱 (山茶科)

Eurya japonica THUNB.

一名「こしば」「あくしば」また「やまちゃ」ともいふ。山野に自生する常緑の小喬木で「さかき」に似て少し小さく、葉も小さく、鋸歯がある。花は五弁の小形で紫白色。実は丸く、紫黒色になる。



HISAKAKI

九州地方では「灰汁柴^{あくしば}」と言ひ、この葉を茶に代用するとかで、伊豆地方ではその焼灰を「山茶灰」ともよんでゐる。「玉篇」には「枱^レ荆可^レ作^ニ染灰^ニ者也」とあり〔紺屋口伝〕には「木灰汁は、山茶灰一升に水一升にて作る」ともある。枱の代用として、神事にも使用される。



さはふたぎ

(灰木科)

Symphlocos Crataegoides MIQ.



SAWAFUTAGI

深く造ってゐる。五月頃、新しい葉と共に淡黄白色の沢山の花を簇生する。実は小さい青藍色の粒状。尚、材質が粘密なので、小道具を作るに用ひられ、又鑿の柄を作る。この幹材を焼いて光沢ある白い木灰を作る。「にしっこり灰」といはれるもので、南部紫根染は、その発色の灰汁をこれでやってゐた。それが紫染に働く有効成分はアルミナ及び炭酸加里である。(六十四頁及参照) 因に、「にしっこり」と「錦織」の氏称には何かの相関があるらしい。

一名「にしっこり」、別名「やまうつぎ」「あをだまのき」「るりみのうしころし」ともいふ。原野に自生する落葉の亜喬木で、樹高七八尺、側卵凸頭形といふ葉を互生してゐる葉は全面に毛を密生して、また皺を

あかさ

藜 (藜科)

Chenopodium album L. var. *Centrorubrum* MAKINO



AKAZA (Flgweed)

山野路傍に自生する一年生の草本。茎は直立四・五尺に伸びるものもある。葉は三角状卵形。若葉は白、紅紫色のものとがあり、後、緑色となる。夏、枝頭及び梢葉の間に、黄緑の細かい花をむらからせる。

若葉の色の白く、塩をまいたやうなものを「しろあかさ」(又はしろさ) 又「灰藜^{あかたで}」といふ。これを灰として「紅」製造の時、紅花の色素を溶解する「秘法の灰汁」(十八頁「べにばな」参照)を作る。この灰ですると、最も紅の色上りがよくなるといふ。「(和名抄)」は之を「阿加佐」と訓じてゐる。

若葉は食用、また薬としては茎葉を乾燥し、その煎汁は歯痛を止め、生葉の汁は虫傷を治すといふ。

い し ば い

消石灰

Calcium hydroxide [Ca(OH)₂]

染色用「いしばい」は「消石灰」即ち「水酸化カルシウム」である。青白い色の上質のものを選り、甕の様な容器に入れ、水を一
杯にはり、よくかき廻して静置して置く。発色に当ってこの上澄み
液を使用するのである。

「すはう」を発色して、紫赤色の所謂牡丹色となり、「かりやす」
で青気のある黄色を発色する。「はん」「やしや」「うめ」「こなし」
などに使用しては茶気の色相を発する。また「うこん」に対しては
鉄発色をした上で、更に石灰発色をさせると金茶(参六頁照)を染め出す。
この発色は極めて少量で効くものであり、過量にならない様に留
意しなければならない。また石灰の使用も、ともすれば糸質を損ず
る惧れがあるので、手早くし、水洗を充分にすべきである。

尚、これは藍建に当って、そのアルカリ性を保持する上に重要な
ものであり、また糊型染に使用する糊には、糯米の粉と米糠と、こ
の石灰を使用する。所謂「石糊」(いしのり)である。

み ゃ う ば ん

焼明礬

Alumen Ustum Ust. [AlK(SO)₂]

此処に謂ふ「みゃうばん」は結晶明礬を熱して白色の粉末とした
もので、所謂「焼明礬」である。明礬を使用したのはかなり後世のこ
とであり、延喜式の染法の中にはまだ全く使用されてゐなかった。

これによる蘇枋は、灰汁発色による紫気の赤に対して、甚しく鮮
紅色を呈するので、後代この発色による「赤染」が、茜の「緋染」に
代替して流行した。

尚、酸で下処理したものを「すはう」で染めてから、明礬で発色
すると緋色を染出する事が出来る。また「かりやす」「きはだ」「く
ちなし」等の発色にも使用して、赤味を起すのに利用される。この
明礬発色の場合、これを下地にして染色すると好結果が得られる。
殊に帛地染の場合には、この方がよい様である。また描更紗など
の下地にも、明礬を引いて始めるのである。

発色には、水または微温湯一斗に対して、約老奴を溶解して用ひ
る。この場合、初め温湯に溶解して置く方がよい。



おはぐろ

鉄漿

Ohaguro.

「おはぐろ」は「鉄漿」と書き、俗に「かね」とも「鉄」ともいふ。一種の酸化鉄で、黒染また鼠染、茶染に欠くべからざる発色料である。古代「黒土摺」に出立した黒染が、漸く「黒灰摺」となり、遂に煎出液による手法を用ひるに及んで、鉄分のある泥土、即ち土中の鉄分を利用するに到り、更に緑礬の実用となり、また所謂「かね」の使用となり、近代に於ける木柞酸鉄の応用となったもので、「装束色彙」に「金ニテ染ム濃紫の由也」とあり、「三内秘記」にも「かねぞめ 黒染」に「三十頁 金ニテ染ム濃紫の由也」とあり、「桃花薬葉」には明確に「濃打ハ五倍子鉄漿染ナリ」とある。「衣服令」では「摺衣」の次、「すみぞめ 橡墨」の上にある「はりぞめ 紫」は、すべてこの鉄漿発色によったものであらう。しかし「縫殿寮式」に到ると、この発色による事はなかったことが明瞭である。これは官位の染色用度例であって、「衣服令」以来、庶民の階級は依然これを実用したと見るべきで、民間染色はこれを第一のものとしてゐたのである。

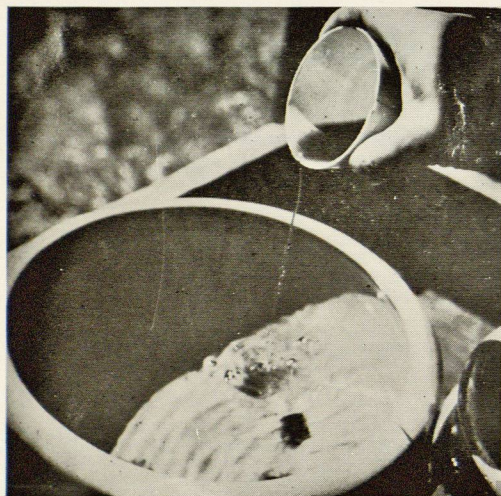
〔染物早指南〕には「鉄漿（かね）」かね おはぐろ 川水より堀ぬき井戸の水、一しほよしと云ふ。鉄器の破れその外種々の鉄類にて出す、婦人方の常に用ひるおはぐろの如くかこひ置いて、つかひしあとへ水を入置てつかふ」とある。往昔より歯を黒く染めるにも用ひら

れて、「おはぐろ」
（御歯黒）と俗称されてある。

「はぐろめ」とも「はぐろみ」「和名抄」とも云はれ「みんぶし」又「やしやぶし」の粉末を混交して歯を染めたのである。

〔手染重宝記〕によれば「常の酢一升、水一升五合まぜ鉄の古金百目程入れ二升になるまで能く煎じ、その儘一日一夜置、黒金取出して成る」とあるが、また古鉄を小麦、蕎麦などの穀類の汁又黒砂糖、或は飴、酒等に浸して作る法もある。うどん、そばなどのゆで汁を使ふと云ふのも同じである。鉄片は赤熱して入れるのであって、これはサビを落す為である。時を経るほど良質となるもので、染色に先立って静かに汲出し、水または微温湯の中に入れ、よくかき交ぜてするのである。

また木柞酸鉄を時に代用するが、この場合にはなるべく、その稀少量を点滴する程度にしたい。尚、鉄で発色をするものは糸質を損傷しがちだから、充分に水洗しなければならない。



* おはぐろ、又は木柞酸鉄を点滴して……

うめず

梅酸 烏梅

Umezu. Ubai

「うめず」は「烏梅」(うばい)または「むぎうめ」より浸出して作られる。紅花染に使用し、また「紅」の製造に際しても重要される。

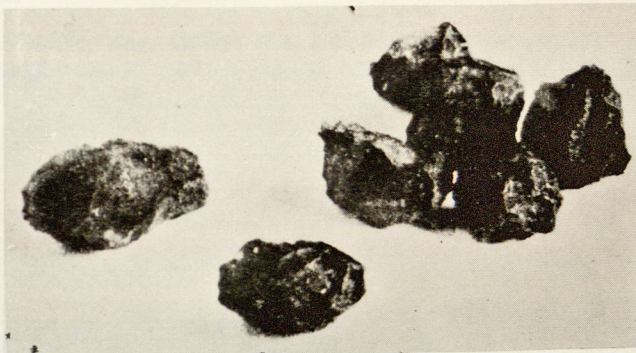
「烏梅」「むぎうめ」共に三倍の水に浸して、一、二昼夜置き、薄い煎茶色の浸出液にして用ひる。近時「クエン酸」Acidum Citricum Acid Ct. ($C_6H_8O_7 \cdot H_2O$) を実用するが、有機性の「うめず」に如くはないと思はれる。

この手法のクエン酸を使用するには、温湯にて百倍溶液を作って置いて用ひる。また「生酢」「氷酢酸」 $[FeSO_4 \cdot 7H_2O]$ もこれに代用してゐる。尚「縫殿寮式」によれば「むらさき」「すはう」「あかね」「くちなし」染にも少量の「米酢」を使用してゐる。

また、紫蘇の葉で梅干や紅生薑を染める、これを、染色的に見ると、「しそ」に含まれてゐる特殊の色素が、梅の酸に発色されて紅染となるのである。(頁十頁しそ、十八頁くちなしを参照) 私の実験によると、この葉を「花餅」のようにして、紅花染の手法で紫紅色を染め得ると思はれた。

烏梅 (うばい)

「紅花」の発色に欠くべからざるものとして、この「うめ」を黒焼にしたもの、即ち「烏梅」(頁六十九参照)があり、「はぎうめ」がある。



烏梅の製法は、梅の実の黄熟したものを、藁灰の焼けてまだ赤火を蔵する頃に、この中に蒸し焼ぎにしたもの。「はぎうめ」また「むぎうめ」も、その完熟したものを刃物でむいて、その先に核をぶら下げる様にして乾したもの。注意として、梅実は熟すれば枸橼酸が多くなるものであるから、染用には熟果を使用すべきである。

「手染重宝記」によれば、「黒茶、鶯色類を色抜きするには、むき梅に水をかけんし、やきなべ(陶鍋)にて何べんもたき、これにてぬきてよし」とあり、またこの梅酢又は生酢の利用として同書に「紅をぬくには、俵をたき、火のある灰に湯をかけてあくをたれ此あくにきぬを付をけばことごとく紅ぬけるなり(頁五十九参照) そのぬき紅をよくさまして酢に入れて染むべし」とある。

「こ」の使用は相当古くからあったらしく、帛地の染色には欠く事の出来ないものである。

「こ」を作るには、大豆二合を水に浸して、一夜を置き、摺鉢にて摺りつぶし、水一升位を入れ、よくかき廻して、木綿布にて漉して作る。

嘉永六年版「染物早指南」によれば、「豆汁は地合をしめて染色を止めるものなり。石の手洗鉢、石菖鉢などの水を引く石には、この汁を引き、乾かして水を入るれば、水を保つこと妙なり。石面すら、理を固くするの効あり」とある。

糊型染の場合は糊を置き、乾かした後に豆汁を引き、乾かして染めるのであり、摺染の時も豆汁を引いた後に染色を行ふのである。尚、描更紗なにも豆汁を使ひ、また帛地染の多くの場合にもこれを使用する。これは型の滲浸を防ぎ、定着にも利する処が多いのである。

南部紫根染も、先づ帛地をこの豆汁に浸して乾燥し、「むらさき」の色素の、定着に便するのを秘法としてゐる。

上代に於ける土中の鉄分、所謂「田圃染」(たんぼぞめ)に前後して使用されたのは緑礬含有砒(孔雀石類)による発色であつたらしい。これが鉄発色剤の原始をなしたものである。この緑礬が、即ち硫酸鉄であり、鉄発色剤として好適だったのであらう。

発色に使用するには、あらかじめ温湯で百倍溶液(即ち1%液)にして置き、水又は微温湯の中に数滴を点滴し、よくかき廻して置くのである。

発色剤としては以上の他に硫酸銅、塩化銅、塩化第一錫、塩化コバルト、また重クロム酸カリウムも利用されるが、これらはすべて劇物であるから、その取扱ひと、殊に水洗には充分留意しなければならない。

洗 剤 に つ い て

洗たくする場合には、古来、灰汁(あく)を第一とされてゐるが今日としては、あくが利用されないときには、大要「中性洗剤」の使用が、無難のやうである。絹の場合、洗たくはいづれも木綿よりは強いやうである。(藍染は例外であるが)

染色

熱煎（色料をとり出すこと）

植物に含まれてゐる色素の量は、その染材料によって違ふので、染色の場合に、予めその分量を定める事は困難である。

採取の時期、また生育状態により、染材の新旧により、その色料の含有量が一定せず。尚、煎出し得る量にも差異のあることは、生物としての有機染料である為には当然である。

もともと、染料となる為に生育してゐたものではないから、これを染材とするには、当然手法が必要である。そこで、「むらさき」「くちなし」「べにばな」「あゐ」等を除き、普通のものゝ場合にはすべて熱煎して、これを煎出する方法が採られるのである。（濃色を求める場合には染液を煮つめてする。）

まづ染材料を熱煎し、煎液が相当濃い色になつた処で、手早く箆またはスィノウを置いた容器に煎液をあげ、再び第二液、乃至第三液を煎出するのである。

「すはう」「やしや」のやうな比較的煎出し易いものでも、第一、第二、乃至第三液の内容はかなり異つた色料を溶出してゐるので、この煎液は、必ず混淆して均等にする必要がある。

尚、煎出に用ひる鍋、煎液を受ける容器、発色に用ひる器などは

すべて鉄製品をさけて、陶器（兎鉢）、瀬戸引、或はアルミ製品を使用しなければならない。

この染色が、常に鉄、酸、アルカリ等による化学変化を利用する染色だからであり、たとへ鉄発色をするものにも、染色前の鉄性化合を避けなければならないからである。

浸染（染液に浸すこと）

かくて、煎出した染液の中に被染物（染めるもの）を浸染するのだが、被染物は、微温湯に充分浸してから引上げて、ムラの出ない様に染液につける。（この染液は、薄くして、なるべく大量の液で染めたいのもである）液中の色料は、水量の多少にかかはらず、すべて吸収されるものだからである。尚、時間をかけて染色する事は、

堅牢度を増す為に重要事である。

尚、注意すべき事は、二つの違つた染材料の煎液を混用することはしない方がよい。つまり、各々の染色を別々にする方がよい結果を得られる。所謂下染と、上染といふ仕法で



＊ 鍋を開けて煎液を分離する（染材は、やしや）

ある。

例へば緑色を染めるためには、「あゐ」の下染に「くちなし」「きはだ」「うこん」などの上染。黄丹（おうに）ならば「べにばな」または「すはう」に対する「くちなし」を、それ／＼時を隔てゝ染める手法である。但し「しぶき」と「やしゅ」による藍下の黒染、また「すはう」と「はじ」に依る黄檗染（くわうろぜん）などは、混合して染める方が良い場合もあるが、これは例外である。

発色（色を定着すること）

色料を充分に吸収したならば、被染物を染液から上げて、発色剤を入れた器の中で発色させる。その前に（微温湯に浸してする方が、溶解もよく、発色もやゝ早目のやうである。）

発色液の中に浸して置く時間は、少なくとも十五分以上を経なければならぬ。この発色の時に、多く染めムラを作るので



* 染液で糸を染める

あるから、水の量を多くして、なるべく薄い発色液で長時間かかてすれば間違ひが少ない。

発色が充分出来たならば、次に水洗ひをするのである。（出来れば流水の中でのするのが一番良いのだが、）殊に鉄剤や、石灰の発色剤を使用した場合は、何回となく、充分に水洗する必要がある。

水洗し終ったなら、日光に干し上げてから、また新しい染液につける。そして、発色、水洗、干し上げ、——それから更に、染液に行く、これを何度も繰返して、所期の色相を染出するのである。簡単に染まるものや、淡色でも二、三度の繰返しは必要である。

これは、単に色の濃度の問題でなく、これにより草木染特有の深味のある色調を染出し、また堅牢度を増すからである。

尚、注意として——「すはう」の赤染や、黒染の場合の「やまうるし」また「やしゅ」と「しぶき」の混染の場合には、例外として発色した被染物を、水洗せずに、そのまゝ前の染液に浸けて熱染をする。この熱染も特殊なもので、大体冷染（ひやぞめ）です。

尚、発色の一つの法として、染色を行ふ以前に、被染物をまづ発色液に浸けてから染めるものがあり、「あかね」「むらさき」などに応用する。これは帛地染の場合には、他のものにも利用される。

尚、草木染色の場合いつれの時にも、直射日光で乾し上げることが重要である。（紅花染は例外）色相に耀きを持たせ、後日の褪色をも防ぐのであり、色彩を濃くし、染色の定着をも助けるからである。

また、草木染が褪色するといふのは、染色が不充分であるか、化学染料を混用した場合が多いやうである。

染色

二

むらさき染

「むらさき」は最高六十度以下の温度の中で操作すること。(高温に遇ふと紫が黒くなる) まづ、温湯の中に乾根を浸して一昼夜置き、柔くなった処で、よくよくもみつぶす。(多いものは、藁杵をつけた杵で臼の中でつきつぶす。) つぶして、泥状の液汁となつたならば麻袋で漉して染液を根材より分離し、袋に残った根にはまた温湯をそゝいで、これで二番、三番液を作つて置く。

被染物はあらかじめ灰汁に浸けて、その質のものにして、染めにかゝるのだが、(この灰汁の操作は古来秘法とされた) これには「つばき」「さはふたぎ」の灰などを用ひたが(六十一頁参照) 近時、炭酸カリウム(五十九頁参照)を利用する。

この灰汁処理をしたものを染液に浸け、色料の吸収をまづ灰汁水にて発色し、陽に乾し上げる。それを数回繰返すと、薄紫色となるが、「本紫」(ほんむらさき)に至るには数十回を要するのである。(二番液、三番液をも、次々と使用、染かけてゆくのである。)

くちなし染

「くちなし」の染法は「むらさき」と同種、二回乃至三回の繰返

しをすべきである。

「くちなし」には自体が多く酸を含んでゐるので、普通には発色剤を必要としないが、染色前に明礬、灰汁等で一応処理して置く結果が好い。尚「すはう」の下染したものに、これを上染すると緋色の色相が得られる。

べにばな染

「べにばな」の花弁を処理した「花餅」(十八頁参照)を、まづ水に浸す。一昼夜浸けて置いたものをよく揉みほぐして、そこに出てくる黄色液を充分脱離させる(この液汁で、別に黄色を染める事が出来る。) ほぐした花餅を、用意した灰汁の染槽に入れると、たちまち、紅色の花弁が、赤褐色に変化する。しばらく静置して置くと再び多少の紅色を帯びて来る。——そこでこの

溶液を麻袋又は木綿袋で漉して、他の容器に入れる。これが紅染の染液である。

かくてこの液の中に酸を入れ、液は忽ち鮮紅色となり染色をなし得る状態になったのである。



* 紫根の液汁を袋でこす

使用する灰汁は、古くは「あかぎ」(六十一頁参照)の灰を第一としたが、

近時炭酸カリウムを利用し、また酸も、古来「烏梅」(六十四頁参照)を使用した、今はクエン酸を代用してゐる。

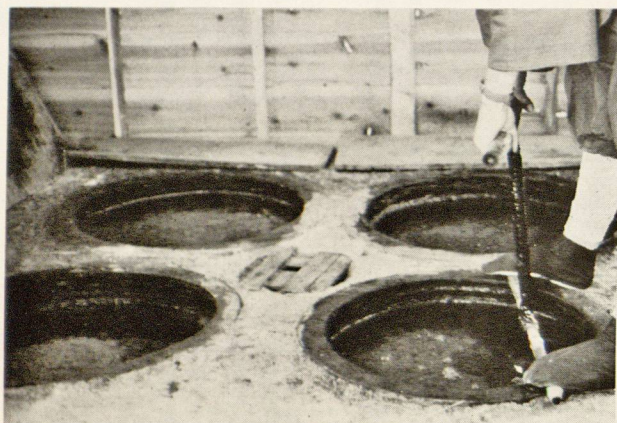
尚、この染液を麻又は綿に染め、再び灰汁で液に採ったもので、染めると、万葉の「桃花褐」(ももぞめ)に類する美しい色調を染め得る。またこの残液を利用し、熱染して黄褐色(花黄染)を染める事が出来る。

あ る 染

草木染の上で、青の系統の染色には「あゐ」を欠くことが出来ない。しかも、この有機染料には「藍建」(あゐだて)といふ手法——やや専門的な手法がある。所謂、紺屋(こんや)といふ職業も存在したのである。

この藍建は、将来、科学的の手法をもって、より利便なものとなさねばならないが、こゝには敢て古来の法をしるすと、——

まづ「あゐ」の葉をハッコウさせて作った藍玉(あゐだま)(頁三十二)を藍甕に入れて染め得る状態に



＊ 藍甕で藍糸を染める

するのである。

藍建の仕方は、瓶に水を七分目入れる、一昼夜置いて石灰五合、フスマ五合、曹達灰五合、木灰八合を入れて、よく掻き交ぜる。そして、火を入れ、水温を二十度——二十五度に上げ、時々掻き廻しながら、泡立つを待つ。

やがて——五日乃至十日(気候によって差がある)泡がやがて青味を持ち、水に赤味が出て来たならば、更に石灰五合、フスマ五合ほどを加へ、ぬるま湯を増して瓶一杯にする。また二、三日して石灰三合、フスマ三合、曹達灰三合を入れ、染液をアルカリ性に保って置く。(アルカリが強くなりすぎた場合には酸を加へることもある)かくて仕込んでから約二週間位で、染め得られる。(常に、この状態を保たせるのが苦労なのである。)少なくとも、朝夕二回は掻き廻して、その具合を見る。

染色は、被染物を、この中に浸し入れて染めるだけである。一回で、「甕のぞき」となり、二回、三回と浸してはしぼり、また風に当て、また浸すことを繰返して、浅黄(あさぎ)、中藍、縹(はなだ)等を染め、紺には十数回を染めるのである。(濃色には、時に陽に乾して、また染めつゞける。)

尚、青又は緑色系を染めるには、薄浅黄から、中浅黄位に下染をして後、「かりやす」「きはだ」「くちなし」「うこん」等で上染すると、それぞれに違ふ青、又は緑色系を染め得るのである。またこの藍で下染したものに「すはう」の上染をすると、所謂「江戸紫」の色相も染まるのである。

後記

本書は、序にしろしたやうに、昭和八年刊行の先著を基として、その後の研究、実験を加へ改訂、増補したものであります。従つて草木染三部作として、第一作に当るものであり、第二「百色鑑」第三「手織抄」の順であるべきだったのであります。幸に、この順逆をも諒されんことを祈ります。この書の造製もまたかなりの困難を経たことであります。

それを言えば、本書はその記述の質に於て、新を求めるといふよりかは、敢て保存のことに立たうとしてまゐつた風であります。

例へば、「藍」のこと、「藍建」のことについても、敢て一世紀ほどをも後帰つて——「染物早指南」（嘉永版）の古伝書を取上げたのであります。勿論その後にも種々に探求し得た点もありませうが、こゝには、まづ古手法に一度立帰つて、それから試みたいとしたのであります。即ち、この古法そのものが、新しい科学的の攻究に、直接にタッチして欲しいからであります。

言つて見れば、私共の研究所では、現在、その古法によつて藍甕も建て、その一途に藍染をも行つて居ります。正真正明のそのものを以て、実験し得たいからであります。

尚、本文の記述、印行に際して、敢て旧仮名を用ひました。これは懐古でも復活論からでもありません。たゞ、古記録、文献の再出を必要する点からの考慮によつてであります。

兎に角「論より証拠」といふ私共の立場によつてゝあります。

この執筆、編成には長男、青樹が助手してくれました。写真また主として彼の撮影によりました。植物に就ては初刊以来近藤武夫氏に因る処であり、本文また写真印刷のすべてに於てミツバ印刷主笹崎誠治氏及び原政夫、市川久雄の両氏の厚情と労苦に成り、写真整理その他には田中菊三氏を煩しました。記し

て謝意を表します。

尚、見本絹糸の染色は山崎斌、豊、それに長谷部孝子さんが助手してくれ、英訳はすべて山本雪さんの好意に成り、校正、索引にまで飯山正文氏の助力を得ました。

和紙はすべて月明・清流紙。成井正夫氏夫妻、及びその父重三氏夫妻の労作に依るものであります。

口絵、第一藍図の複製は、彫、大倉半兵衛、刷、吉田竹三郎両氏の努力に成り、第二紅花摘図の原色写真は、山形・佐藤八兵衛氏の撮影であります。

造本では、装幀・山崎斌。表紙布、藍染・手織は草木染伝習所。製本は竹村製本所。事務、田村愛。

尚、使用の草木染の染材は紫草、赤沢純一郎、紅餅、佐藤八兵衛、浜梨、那波三治の諸氏により、その他、草木染研究所及び志平漢薬店の在庫に依りました。

材料糸、撚糸その他には農林省横浜生糸検査所、大岡忠三氏、鈴木四郎氏、神奈川県織物指導所、大山善衛、井上政雄氏等の好意を享けました。すべて事にふれて、まことに感謝のかぎりであります。

感謝と言へば、この後記を書いて居ります書斎には、今度新しく湧水をはじめた噴井の水音がして居ります。四月尽の日からであります。草木寺の諸用を果してくれて、尚流下し、水田五町歩をも沾してくれるものな相であります。本書の、草木染糸も、すべてこの溢水に洗はれたものであります。

昭和卅六年八月好日

草木寺 和貴井 畔

著者 しるす

ぬ き 紅64
ぬ る で31, 32
ぬ るでもみち32
濡 れ 色37

ね こやなぎ54
鼠 色28, 52, 46, 58
鼠 染63
ねむらさき13
熱 煎17, 25, 54, 55, 66
ねかし室21
鼠 気44
鼠 系57
合歡木 (ネム)
粘 着 度37
ねばりはんのか33

濃 色32, 46, 57, 66, 69
濃 緑 色24, 50, 60
の での き31
糊62
糊 型 染62, 65
濃 液 度54
濃 度30, 35, 51, 67

は 灰14, 23, 50, 51, 59, 60
61, 64, 68, 69
灰 色54
灰 黒 色54
灰 摺 木 科59
灰 梅 白 青 色61
萩20
はぎうめ32
はげしぱり33
はじ・黄檀漆64
檀51, 67
檀 もみち17
膚 色51
発 色41
12, 14, 16, 18, 20, 21
22, 24, 25, 26, 27, 28, 30
31, 33, 34, 35, 36, 39, 41
42, 43, 44, 46, 47, 48, 49
50, 51, 52, 53, 54, 55, 56
57, 58, 59, 60, 61, 62, 63
64, 65, 66, 67, 68
発 色 剤17, 45, 53, 59-65, 67
68
発 色 槽56
発 色 料59, 63
発 色 浴34
鳩 羽 鼠32
花 黄 染69
花 柘 榴34
縹 (ハナダ)21, 22, 69, 38
はなだぐさ38
朱華 (ハネズ)19
はなたちばな40
はりのき33
浜梨・はまなし40, 48
花 餅18, 19, 20, 52, 64, 68
薬 (ハリゾメ)33, 63
は ん・榛28, 30, 33, 43, 54, 62
は ん の き30, 33
榛 摺28, 30

は り33
礬石 (ばんじゃく)16
白 色31, 40, 50
白 帛59
芭 蕉36
波 里33
パチルス・インチゴゲヌス22

ひ 緋12, 19, 20, 28, 36, 51
59, 62, 68
緋 染36, 62
ひさかき・杓60
杓 灰59
飛 驒 春 慶41
冷 染67
水 酢 酸64
ビンラウ41
びんらうじ・檳榔子34, 35

ふ 深 浅 黄19
深 支 子20, 24
深 蘇 枋16
深 縹23
深 緑23, 25, 27, 28, 40
深 紫14, 32
ふくらもち50
ふし・ふしのき31
榎金染 (フシガネゾメ)28, 31, 32
63
藤 色 染16
藤 紫17
フ ス マ69
葡 萄 鼠32
葡 萄 紫30
ふうろさう58

へ ベ に・紅11, 15, 16, 18, 19, 20
41, 47, 51, 61, 64
べにばな・紅花12, 18-19, 20
24, 36, 59, 61, 64, 66, 67
68
紅 下44
紅 染44, 47, 64, 68
紅花染・べにばな染19, 20, 36
64, 67, 68-69
紅 緋16, 20
紅 生 薑16, 20, 64

ほ ほたるぐさ38
牡 丹 色62
本 紫68
本 紅 染37

ま 真 黄 色42
真 木 灰59
莖 科16, 17, 52, 57

み みこしぐさ58
実 柘 榴34
緑21, 22, 23, 25, 40, 51
54
みやまかいどう45
明礬・みょうばん12, 17, 24, 27
34, 35, 41, 52, 54, 56, 62
68
明礬発色62

明礬溶液46
五倍子 (ミソブシ) みんなし29
31-32, 39, 63
民間染色63
む むきうめ64
むらさき・紫11, 13-15, 16, 20
24, 31, 38, 41, 59, 65, 66
67, 68
紫 草13-15, 59
紫染・むらさき染59, 61, 64, 68
紫 氣20, 44, 57
紫 鼠32
虫 除 け25

め 茗 荷 科36-37
---------	------------

も 木 醋 酸 鉄42, 56, 63, 65
もっこく・木斛49
モ ミ 色36
木 綿 (もめん)37, 65, 68
39, 46
桃 花 褐 (モモノメ)19, 20, 69

や 矢 車30, 39
やしや30, 62, 66, 67
やしやぶし・夜叉附子28, 30-31
31, 32, 63
やなぎ・楊柳33, 54
山 藍・やまある21, 23, 44
山 あ く60
山 漆・やまうるし44, 67
山 桜 茶46
山 灰60
山 茶44
やまもも・楊梅31, 39
やまもも62
焼 明 礬51
薬 用51

ゆ 有機染料66, 69
夕 茜12
友 禪 染 色38
有機染料17

よ 羊 羹 色35
夜 の 色30

ら 乱 花18
-------	---------

り 琉 球 染 色49
琉 球 藍21
琉 球 鉄 色65
琉 球 緑 色30, 41
緑 色17, 25, 31, 40, 41, 42
55, 61, 67, 69
緑 青 色55
緑 白 紫30, 31
緑 葉 摺63, 65
21

る 珪 璃 色39
るりみのうしろし61

れ レンガ色39
れんげつつじ53

よ 蠟 燭 の 蠟51
-----------	---------

わ 綿69
藁 灰 汁19, 20, 24
26, 59, 64

日 藍 (はくらん)	25
白帛 (しろぬの)	59
しろぎ・しろあかぎ	61
白 梅	46
白 茶	44, 46, 52, 54, 57
白 松 杉 科	41
消 灰	33, 42, 62
猩 木	41
薔 薇 科	39, 40, 45, 46—47, 49
上 貢	24
上 紬	57
笏 (シャク)	41
石 楠 科	53
しやりんばい・浜木斛	49
収 斂 剤	32
重クロム酸カリウム	65
棕 櫚 科	35
純 白 色	54
深 紅 色	35
深 黄 色	35, 36, 51
浸 染	12, 19, 21, 22, 24, 25
26, 30, 33, 34, 35, 37, 38	
51, 53, 54, 56, 57, 66—	
67, 59	
深 緑	40
浸 染 法	59
形 科	20
真 紅	51
真 緋	52
草 差	26, 27
色 色	36
色 彩	18, 67
相	14, 16, 17, 20, 21, 22
26, 27, 29, 31, 33, 34, 36	
37, 40, 42, 46, 44, 48, 50	
55, 62, 68, 69	
色 調	57, 59, 69, 67
塩 下	61
凶	38
植 物 染 料	16
緒 褐 色	21
小 藥 科	53
す	18, 19, 24, 28, 51, 63
酢	64
水酸化カルシュウム	62
すいばかりやす	26
染 藍 (スクモアキ)	22
すゝき	27
蘇 枋・すはう	12, 14, 16—17, 18
19, 20, 21, 24, 39, 41, 51	
62, 66, 67, 68, 69	
蘇 枋 染・すはう 染	62, 64
橡 墨 (スミゾメ)	28, 29, 63
筆 色	58
ず み	45
摺 衣	33, 59, 63
摺 染	21, 24, 29, 33, 38, 60
65	
摺 花	38
スイノウ	66
水 中 酸 素	22
墨 (紅花墨)	18
末 摘 花	18
せ	
茜 草 科	11—12, 24
青 藍 色	38, 61
赤 褐 色	33, 37, 39, 46, 48, 53
68	

赤 黄 色	34, 51
赤 色	34, 37, 45, 50, 57
赤 黒 褐 色	33
青 白 色	32
石 灰 水	25, 27, 46, 47, 49, 54
62	
石 灰 媒 染	47
石 灰 発 色	62
石 灰 溶 液	36, 40, 55
鮮 紅 色	19, 62, 68
鮮 藍 色	38
鮮 黄 色	55
染 液 色	68, 69
染 色	18, 20, 25, 66—69, 32
33, 39, 41, 42, 43, 46, 50	
51, 53, 54, 56, 57, 58, 59	
62, 64, 65	
染 色 剤	61—69
染 槽 用	68
染 用 茶 色 料	21, 33
染 材	50
24, 33, 36, 39, 41, 42	
48, 50, 52, 53, 54, 55, 56	
57, 66	
染 着	19, 33, 40, 54
染 法 用	28, 35, 46, 57, 59, 68
染 用	18, 30, 34, 33, 35, 40
42, 44, 45, 46, 47, 48, 49	
53, 54, 55, 56, 57, 58	
染 料	18, 31, 34, 36, 39, 42
45, 50, 52, 53, 66, 68	
そ	
曹 達 灰	69
桑 白 皮	51
蕎 麦・そば	27, 63
藕 (ソビ)	23, 28
染 木	50
そ め し ば	26
染 灰	60
染 用 木 (ソヨギ)	50
そ よ ご・冬 青 (ソヨゴ)	23, 50
染 草	43
た	
樟 黄 色	35
大 青	21
帯 黄 色	54
帯 赤 色	42
帯 赤 赭 黒 色	30
帯 緑 褐 黒 色	33
褪 色	37, 67
タガヤサン	41
だ し か ね	63
た て あ る・夢 藍	21, 23, 44
蓼 科	21—23, 55
た ま く す・玉 解	48
た ま ね ぎ	56
た ぶ の き	48
田 圃 染	16, 35
淡 青 色	31
淡 色	57
淡 紅 色	41, 46
淡 黄 色	23, 44, 51
淡 黄 白 色	61
淡 黄 緑 色	54
淡 紫 色	56
淡 緑 色	40, 48, 54, 55
炭 酸 カ リ ウ ム	18, 59, 61, 68, 69
タ ニ ン	28, 29, 32, 40, 43, 44

50, 56, 57, 58	
大 豆	57
ち	
中 藍	25, 69
中 浅 黄	69
中 緑	25
竹 青	38
ち ち の き	54
茶・ちや	28, 5, 60
茶 褐 色	34, 43
茶 気	62
茶 染	63
中 性 染 剤	65
チョコレート色	57
チャコールグレイ	58
朝 鮮 人 蔘	13
地 血	15
つ	
つきぐさ	38
椿・つばき	21, 50, 60, 68
椿 油	60
椿 灰	14, 50, 59, 60
山茶科 (ツバキクワ)	49, 50, 60
山茶灰 (ツバキハイ)	60
つるばみ・橡 (ツルバミ)	28, 33, 44
橡 色	28
橡 染	52
つゆくさ・露草	38
て	
鉄	17, 37, 44, 48, 49, 63
66	
鉄 剤	67
鉄 気	12, 17, 56
鉄 気 土・鉄 気 土 質	31
鉄 発 色	28, 29, 32, 36, 62, 66
鉄 発 色 剤	65
鉄 漿	32, 35, 36, 40, 45, 54
63	
鉄 漿 染	32, 63
鉄 漿 発 色	20, 31, 33, 34, 35, 42
43, 46, 49, 50, 52, 55, 56	
57, 58, 63	
天 竺	16
定 着	65, 67
と	
唐 棧 縞	17
常 磐 黒	39
特殊タンニン	33, 39, 46, 47, 48
52, 53, 55	
蔦 色	40, 48, 64
蔦 青 染	16
蔦 八 丈	40, 48
泥 藍	23
な	
生 根	15
なんてん・南天	53
南部紫根染	59, 61, 65
な ま ず	42
に	
苦 味	47
錦 織	61
にしこり	61
にしこり灰	61
修 紫 (にせむらさき)	21
にほひぐさ	46

樟 木 科	30-31, 33
禾本科 (クワホクワ)	26-27
薔 観 き	22
かめぶし	32
茅	26
からいも	56
韓紅花 (カラクレナキ)	19
刈安・かりやす	21, 23, 24, 25, 26 -27, 37, 48, 56, 62, 69
かりやすもどき	26
甘 薯	56
蚊 帳	60
雷 除 け	41
嘴みツブシ	17
か ぶ れ	44
カーサミン	18

き

菊 科	18
菊 科 植 物	18
黄	23, 26, 27, 37, 48, 51
木 藍	23
木 灰	59, 61, 69
木 灰 汁	60, 61
黄 系 統	53
黄 支 子	24
ぎしぎし・(波草)	55
生 酢	19, 20, 64
きぞめぐさ・黄染草	26, 36
黄色 (キゾメノキヌ)	27
黄橡 (キツルバミ)	19, 28
絹	65
きはだ・黄膚	11, 25, 16, 37, 62 67, 69
黄栌・岐波太	25
黄 藥	21, 25, 26, 27
黄 藥 紙	25
黄 八 丈	26, 48
生 附 子	39
黄 味 子	56
黄 魚 網	48, 57
金 色	37
金 槐	52
近代茜色	12
金 茶 色	36, 62
ぎんなん	54
銀 鼠 地	57
吊 地	33
吊 地 染	62, 65, 67

く

クエン酸・枸橼酸	19, 20, 36, 47 64, 69
草 摺	21
孔 雀 石	65
樟・樟 科	48
久知奈之	24
くちなし	18, 19, 24, 62, 66, 67 68, 69
支 子	20, 21, 24, 25, 26, 27 36, 37
梔 子	24, 27, 36
くちなし染	64, 68
くぬぎ・樺	28-29, 33, 43, 44, 52
栗・く り	28, 29, 43
くは・桑・桑科	51
栗 皮 茶	43
桑 酒	51
くるみ・胡桃 (クルミ)	28, 42
胡 桃 染	42
呉 藍	18

黒 系 統	33
玄 (クロ)	23
黒・く ろ	28, 29, 30, 31, 39, 43 68
皂衣 (クロキキヌ)	27
黒 砂 糖	53
黒 摺	28
黒 染	28, 30, 31, 34, 35, 39 43, 44, 52, 63, 67
黒 茶	64
黒 土 摺	63
黒 鼠	43, 44, 53
黒 八	31
黒 摺	28, 30, 33, 42, 3, 52 63
黒 灰 染	29
くろめ黒・大豆	57
黒 豆	57
黒 紫	14
黒 ボ エ	15
黒 焼	40, 46, 47, 64
黒 九 真	16
ク リ ー ム	46
空 中 酸 素	22
久 礼 奈 為	18
黒 灰 色	33

け

下 紺	57
減紫 (ケシムラサキ)	14
結 晶 明 礬	62
げんのしょうこ・現の証拠	58
原 始 染 色	26, 38
建 築 用 材	41

こ

こ・豆汁 (ゴ)	65
紅 褐 色	47, 49, 56
紅 木	41
紅 紫 色	51
紅 紫 黒 色	42
紅 黄 褐 色	35
紅 黄 色	18, 24
紅 色	11, 19, 40, 41, 45, 50 68
紅 色 染 料	18
紅 茶	50
紅 藍 花	19
紅 黒 紺 色	33
紅 蘭 花	18
濃紫 (こむらさき)	32, 63
紅 葉	44
貢 進	13
交 染	12, 17, 20, 21, 24, 25 27, 33, 40, 50, 51
紅 梅	46
公 孫 樹 科	5
黄櫨染 (クワウロゼン)	17, 51, 67
黒 褐 色	27, 30, 35, 52
黒 褐 色 染	29
黒 色	17, 29, 42, 49, 57
黒 色 染 料	44
黄 葉	44
黒 檀	41
穀 斗	28, 29, 43, 52
穀 斗 科	28-29, 43, 52
小 柿	57
こ ば	60
こなし・小梨	45, 62
こ な ら	29
米 酢	64

米 糠	62
さかぐさ コブナグサ	26, 27
牛 蒡 根	13
小 麦	63
呉桃染・胡桃科	42
紺	21, 22, 69
紺 屋	62
紺 屋 染	39
混 染	67
五 倍 子 虫	39

さ

茜根 (サイコン)	11
さかき・榊	60
醋 酸 鉄	63
ざくろ・柘榴	34, 50
酒	63
雑 染 用 度	25
さつまいも・甘薯	56
さはふたぎ	14, 61, 68
さはふたぎの灰	59
さ や 真	50
さ や 紺	50
三 帛	23
酸	24, 19, 34, 62, 66, 68 69
酸 化 鉄	62, 63
酸 発 色	36
雑 色	22, 59

し

椎	28
塩 の 木	31
紫 褐 色	35, 56, 57
紫 灰 色	42
紫 紅 色	15, 64
紫 黒 色	30, 48, 51, 60
紫 黒 褐 色	43
紫 紺 色	28, 34
紫 根	13, 15
紫 根 染	60
紫 赤 色	16, 62
紫 赤 褐 色	48
紫 白 色	60
紫蘇・しそ	16, 20, 64
紫 草 園	13
紫 草 科	13-15
紫 檀	41
紫 草	13
此 色 素	18, 19, 23, 44, 51, 61 64, 65, 66
色 土	21
色 土 摺	23, 24, 59
下 染	16, 22, 35, 36, 39, 44 66, 67, 68, 69
しだれやなぎ	54
漆 黒	44
漆 樹 科	31-32
しなのがき	57
柴 (シバゾメ)	29, 33, 63
柴 染	43, 44
しばやなぎ	54
シ ブ	57
し ぶ 色	57
渋 柿	57
渋 ぶ き	39, 56, 67
渋 染	46
渋 味	50
絞 染	38
島 八 丈	48
白	24, 61

あ

阿 為	21
阿 加 弥	11
阿 加 佐	61
阿 之 為	26
藍・あ ん	21-23, 25, 35, 39, 57, 66, 67, 69
藍 搔 棒	22
藍 甕	22, 44, 69
藍下・藍下染	22, 44, 67
藍染・ある染	21, 65, 69
藍 建	22, 62, 69
藍 玉	22, 69
あ ん ば な	38
あ か き 色	19
赤 系 統	42, 56
あ か ざ・黎	61, 69
黎 科	61
あ か ざ 灰	18, 59
茜 草	12
赤 染	67, 62
あかね・茜	11-12, 14, 18, 28, 37, 59, 62, 67
赤 根	11, 15
あかわかづら	11
茜 さ す 紫	12, 13, 14, 16
茜 染	60, 64
あかねもめん	37
赤 味	62, 69
あかみのき	49
赤 紫	14
赤 緋	16
赤楊(あかやなぎ)	33, 54
秋 田 八 丈	40
灰汁・あく	11, 12, 14, 16, 17, 18, 19, 24, 25, 26, 27, 29, 33, 34, 36, 41, 43, 46, 52, 53, 54, 59, 61, 65, 68, 69
灰 汁 桶	59
灰汁染・あくしば	60
灰汁処理	68
灰汁媒染	28, 44
灰汁発色	12, 28, 47, 62
灰 汁 水	68
曙 の 色	20
麻	69
浅 藍	25
浅 色	25
浅 黄 色	22, 38, 44, 69
浅 支 子	20, 28
浅 蘇 枋	16
浅 緋	12
浅 緑	25, 27
浅 紫	14
あづきいろ	37
小豆(あづき)	18, 57
鉋	63
綾	14, 23, 24, 28, 51
退紅(アラゾメ)・あらぞめ	19, 20
青	23, 38, 69
青 氣	26, 32
青 氣 の 茶	53
薊	18
青 色	23
青 摺	23
青 汁	60
あをだまのき	61

青 茶	39
青 茶 色	27, 39, 56
青 鼠	57
青 の 系 統	69
青 花	38
青 花 紙	38
青 味	69
青 緑	25
青楊(アヲヤナギ)	54
アルカリ	14, 20, 37, 39, 66
アルカリ性	22, 25, 62, 69
アルコール	51, 56
アルミナ	14, 61
アルミナ塩	24
暗 灰 褐 色	34
暗 褐 色	53, 60
暗 赤 褐 色	57
安柘榴科(アンセキリュウクワ)	34
暗 紫 褐 色	30, 33
杏	39, 46
麻 囊	59
麻帛(あさぬの)	57

い・ゐ

石灰・いしばい	35, 36, 45, 48, 53, 54, 55, 62, 67, 69
石 糊	62
いたやかえで・板屋楓	55
いちみ・一位	41
いちょう・銀杏	54
いはやなぎ	54
芋 焼 酎	56
いぬぐす	48
印 度 藍	21
田舎サフラン	18
インヂゴゲヌス	22

う

うこん・鬱金	12, 16, 20, 36-37, 62, 67, 69
鬱 金 粉	36
鬱 金 染	37
鬱金の美酒	37
うこんもめん	37
淡黄(ウスキ)	51
薄 藍	22
薄 淡 黄	46
薄 淡 黄	69
薄 牡 丹 色	41
薄 紫 色	68
薄 烏 梅	19, 20, 25, 36, 47, 64, 69
うつし花	38
上 染	66, 67, 68, 69
馬のすいこ	55
うめ・梅	46-47, 62, 64
うめず	64
梅 染	46
梅 漬	16, 20
うめづるさう	58
梅 鼠	46
梅 酢	19, 64
梅 干	64
う る し	44
漆 科	51
漆樹・漆樹科	44
芸香料(ウンカウクワ)	25

え・ゑ

エーテル	51
江 戸 紫	21, 69
蒲萄(エビゾメ)	16
海 老 茶 色	42
塩化コバルト	65
塩化第一錫	65
塩 化 銅	65
ゑんじゅ・槐	17, 52
槐 蘆	25
烟 子	19
烟紫・塩膚木	19, 31

お・を

黄 褐 色	17, 19, 26, 28, 29, 31, 34, 69
黄 紅 色	56
黄 青	52
黄 赤 色	32, 53
黄 色	18, 24, 17, 25, 26, 27, 34, 36, 37, 39, 45, 53, 54, 59, 68
黄 丹	14, 20, 24, 27, 28, 67
黄 白 色	52
黄 氣 の 茶	53
黄 藍	19
黄 緑 色	44, 51, 61
黄 金 色	36

お・を

近 江 刈 安	26
おにぐるみ	42
鬼つつじ	53
小 野 蘭 山	17, 27, 41
重 あ く	22
おはぐる・鉄漿(オハグロ)	16, 39, 53, 63
鉄(オハグロ)	63
御 菌 黒	63
大ぼうしばな	38
おほばみねばり	30
おほばやしやぶし	30
オンコ・おんこ	41
鴨頭草科(オフトオサウクワ)	38

か

灰 白 褐 色	29
灰褐色(クワイカッシュク)	45
かいどう・海棠	45
加 伊 奈	26
貝 原 益 軒	46
楓 科	55
化学染料	67
かきしぶ・柿渋	57
加 木 奈	26
描 更 紗	62, 65
檜	28, 29
かしは・櫛	28, 52
柏	29
かしは餅	52
かぜまちぐさ	46
搗 橡(カチツルバミ)	28
褐 黒 色	52
褐 色	50, 54
褐 色 料	45
かづのき	31
かとりぐさ	46
かね・金(カネ)	32, 63
乾 き 色	37
かはやなぎ	54

初版の序と批評

序のことば

これはウイリヤム・モリスの仕事に近いと言って、以前にわたしは山崎君の思ひ立つたことを生活と芸術と労働との一致に結びつけ、その前途にふかく望みを寄せたことがあった。木の皮、草の根、乃至その花からも、その実からも染むべき材料を採って、織るべく、着るべきことを知ってゐたわたしたちの祖先が手工業のいとなみは、君によって今の代に活きかへるいとぐちを得た。荒蕪を切開くほどの愛と忍耐とがなかったら、君の仕事もこゝまでは進み得なかつたであらう。今や君の草木染色図説一巻が成る。遠く奥羽の野の末、山の奥まで、紫の一もとをさぐり求めるほどの君の熱心から、この一巻が生れた。これは土と草木の香でいっぱいだ。おそろく後の代の人もこの愛すべき書物から得るところは多からうと思ふ。わたしは山崎君の平生を知るところから、更に君の仕事の成長を希ひ、進んではかの古人光悦が残したこゝろざしにもかなひたまへと書いておく。昭和八年夏の日、麻布飲食にて。

島 崎 藤 村

序

山崎君は文芸の士で有ると同時に郷土芸術の奨励者でもある上に草木染の研究であります。そして草木染に就いては同氏は研究と同時に實際的に応用された製作品もかなり沢山発表されました。

元来日本固有の寧楽朝以後の染織は草木染を根本として、それが発達して徳川末期迄続いて来たのが、明治維新後、外国染料の輸入から殆んど草木染と云ふものには不便で省みられなくなつたのであります。

ところが明治末年から又草木染の研究会が方々に有つたり亦實際的にそれが応用されて今日の発達を見たのであります。かかる機運に再現して草木染の色の標本的のもの、媒染の方法や色々書いたものが出来るやうになつて之は一部専門の人々には非常に役立っているのですが一般には存外理解が少かつたのであります。

この時に際してこの度、氏が草木染の方法、それから其原料の草木根皮の実物に及び、写真にて説明し、又それを絹糸に染色された結果の標本を示された本を出版される事に

なりました。之は大変な手数と努力を要する事で容易ならぬ仕事である事は敬服の外ありません。

定めしこの本が印行発売されて多数の人に草木染の知識を与へ、さうして導いて行かれる事を確実に期待されると思ひます。

岡 田 三 郎 助

日本固有草木染色譜

眼前の景、口頭の語、何れか詩歌であらざる可き。芸術と云うも、未だ必らずしも七珍八宝には限るまい。野辺の草木も、若し其人あらば、之を人間の生活に応用し、人間の趣味に合致せしむるに於て、未だ必らずしも不足はあるまい。

信濃の人、山崎斌君は、本来文士であり、且つ新聞記者である。君は月明紙を漉き、月明織を創め、而して又凡有る国産の草木もて、草木染の業を究めた。記者は紙に就て篤好ある為め、屢ば君と接触するの機会を得た。当初は常に世にも奇しき人かなと思つたが、相見して而して後、君は曾て京城日報に於て、予と机案を共にしたる一人であつた事に気付いた。

本書は君が多年の苦心もて、採り集めたるものを、収めて一巻としたるもの。乃ち島崎藤村君が「遠く奥羽の野の末まで、紫の一もとをさぐり求めるほどの君の熱心からこの一巻が生れ」たと云うた通りの産物だ。

本書は草木染の方法より、其の原料の草木皮の実物に及び、之を撮影にて説明し、更らにそれを絹糸に染色したる結果の実物標本を示したれば、何人にも其心ある者には一見領取せらるる。

尚ほ本書は内容ばかりでなく、其の表装の布も其の用紙も、悉く君が手製のものにして如何にも雅趣満々だ。とても其の華麗、文褥に於て、ケルムスコットのそれに比較は出来ぬが、其の素朴高雅の点に於ては、ケルムスコットの出版も、とても及ばないと思はるものがある。

凡そ秋の野辺の干草を眺めても、春の若芽を観ても、其の自然の色彩は、到底人巧の企て及ばざるものがある。さればその自然の色素を採取して、その色譜を成したるは、是れ所謂天巧を亮くる所以にして、良と利用更生の要を得たるものと云はねばならぬ。

徳 富 蘇 峰

—「毎日新聞」(昭和八年十一月)所載—

Old records pertinent to the history of plants of foreign source such as the suoh, ukon, binroju and others which were brought to Japan well over a thousand years ago, as well as on research, costume regulations, dye processes, pertinent laws and references in literature are presented in this section. For instance, extracts from "Nanpo Somoku-jo," "Kokon Chu," "Ifuku-rei," "Engi-shiki," "Nihongi," "Manyoshu," "Wamyosho" and old tales and legends are presented.

Dye Materials and Dye Process

Portions of the dye-source plants to be used are pointed out and explained in this chapter. For instance, the root of the akane, murasaki, hamanasu and ukon; the bark of suo, kihada, ume and ichii; the stem and leaves of kariyasu and gen-no-shoko; the seed or pod of kuchinashi, yasha, zakuro and kuromame are respectively utilized. Benibana is the sole example in which the flower petals are used. One exception in the group is gobaishi, which is actually the gallnut, the nest of an insect parasite of the nurude, making it the sole insect source rather than plant source.

The dye process involves boiling or dissolving the material and then causing chemical coloration process. The chemical mediums used in the latter are listed from page 59, with detailed explanation from page 66 to page 69. Other examples are explained in the respective sections on the plants themselves. 12 photographic illustrations have been provided to show the coloration process.

As it is not possible to produce accurate color samples by print process, 50 small skeins of dyed silk yarn have been attached to appropriate sections, with names of the tints written in Romaji as well as in Japanese.

Frontispiece and Sample Specimen

The first frontispiece illustration shows the picking of the ai plant in a reproduction of a woodblock print of the Edo period, produced by Okura Hanbei and printed by Yoshida Takesaburo. Indigo dye is used.

The second illustration is a color slide reproduction showing the picking of petals of the benibana in Sato Hachirobei's field in the suburbs of Yamagata city. This plant was once used for coloring the lips.

PREFACE

Kusaki-zome is one of the special dye processes of Japan, and is a method for utilizing the pigment and tannin in plants to produce dyes. It is a method which has its source in early primitive attempts at coloration, reaching full development in T'ang period on the Chinese continent and in the Asuka and Nara periods in Japan. The process was further improved and continued to be practiced in Japan until very recent ages.

Needless to say the so-called "dye revolution" which occurred in 1897 brought about a great decline in the art; but in 1929 a movement for the revival of the process under the name of Kusaki-zome developed, enabling the process to be preserved to this day.

This volume is an attempt to present all aspects of this unique dye process. In Part I the plants used in the Kusaki-zome dye process are taken up with 65 photographic illustrations of the parts of the plants utilized, together with botanical notes on each.

In Part II the history of the dye process is noted through extracts from old records, including notations on official research, official costume regulations, and references seen in the literature of the respective periods.

Part III takes up the dye process itself with explanation of source material and coloration process. Due to the impossibility of reproducing exact duplicates of the dye tints by means of printing ink, skeins of dyed silk thread have been attached as color samples.

The frontispiece illustrations and plant specimen are first a woodblock print showing indigo, the second a color slide reproduction showing the picking of Benibana. The plant specimen is "akane"

The paper used in the volume is specially-processed heavy hand-made nihonshi. The cover is of handwoven material done in Ai dye.

Plants Used as Dye Sources

This book takes up 50 plant dye sources including akane, ai, murasaki, suo and benibana with 65 explanatory illustrations. Botanical details are given in the text, with additional notes on the part of the plant to be used, appropriate season for picking, method of preserving, storing and growing each respective plant, and also other medicinal, food or garden uses of the plants.

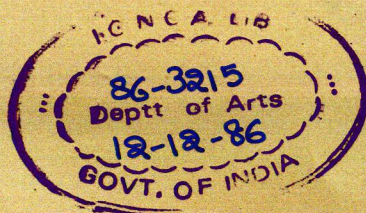
I N D E X

A.	<i>Acer pictum</i> . (イタヤカヘデ)	56
	<i>Aku</i> . (アク)	61
	<i>Allium Cepa</i> . (タマネギ)	58
	<i>Alnus Yasha Matsumura</i> . (ヤシャブシ)	30
	<i>Alnus japonica</i> SIEB. et ZUCC. (ハン)	32
	<i>Areca Catechu</i> L. (ビンロウシ)	38
C.	<i>Caesalpinia Sappan</i> L. (スオウ)	16
	<i>Calcium hydride</i> . (イシバイ)	61
	<i>Camellia japonica</i> L. Var. <i>hortensis</i> Makino. (ツバキ)	62
	<i>Carthamus tinctorius</i> . L. (ベニバナ)	18
	<i>Castanea renata</i> SIEB. et zucc. (クリ)	43
	<i>Chenopodium album</i> L. Var. <i>centrorubrum</i> Makino (アカザ)	63
	<i>Commelina communis</i> L. (ツユクサ, ツキグサ)	50
	<i>Curcuma longa</i> L. (ウコン)	36
E.	<i>Eurya japonica</i> THUNB. (ヒサカキ)	62
G.	<i>Gall-nut</i> . (ミンプシ)	34
	<i>Gardenia jasminoides</i> Ells. Var. <i>grandiflora</i> Nakai. (クチナシ)	24
	<i>Geranium nepalense</i> Sweet. (ゲンノショウコ)	60
	<i>Ginkgo biloba</i> L. (イテフ)	54
	<i>Glycine Soja</i> denth. Var. sp. (クロマメ)	59
	<i>Go</i> . (ゴシル)	67
I.	<i>Ilex pedunculosa</i> MIQ. (ゾヨゴ)	53
	<i>Ipomaea Batatas</i> LAM. Var. <i>edulis</i> Makino. (サツマイモ)	58
	<i>Iron alum</i> , anhydrous. (ミャウバン)	64
J.	<i>Juglans Sieboldiana</i> Maxim. (クルミ)	42
L.	<i>Lithospermum officinale</i> L. Var. <i>erythrorhizon</i> SIEB. et ZUCC. (ムラサキ)	13
M.	<i>Machilus Thunbergii</i> . (タマクス)	48
	<i>Malus Halliana</i> . (カイドウ)	45
	<i>Malus Sieboldii</i> rhd. (コナシ)	45
	<i>Mercurialis leucocarpa</i> SIEB. et ZUCC. (ヤマアイ)	51
	<i>Miscanthus tinctorius</i> HACK. (カリヤス)	26
	<i>Morus alba</i> L. Var. <i>romana loddii</i> . (クワ)	54
	<i>Myrica rubra</i> SIEB. et ZUCC. (ヤマモモ, シブキ)	39
N.	<i>Nandina domestica</i> Thunb. (ナンテン)	55
O.	<i>Ohaguro</i> . (オハグロ)	65
P.	<i>Perilla frutescens</i> brit. Var. <i>Crispa</i> makino. f. <i>Purpurea</i> makino. (シソ)	57
	<i>Phellodendron amurense</i> Rupr. (キハダ)	25
	<i>Polygonum tinctorium</i> LOUR. (アイ)	21
	<i>Prunus Mume</i> SIEB. et ZUCC. (ウメ)	46
	<i>Punica Granatum</i> L. (ザクロ)	33
Q.	<i>Quercus acutissima</i> CARR. (クヌギ)	28
	<i>Quercus dentata</i> THUNB. (カシワ)	52
R.	<i>Rhaphiolepis umbellata</i> . (ジャリンバイ)	49
	<i>Rhododendron japonicum</i> . (レンゲツツジ)	55
	<i>Rhus succedanea</i> L. (ハジ)	51
	<i>Rhus trichocarpa</i> MIQ. (ヤマウルシ)	44
	<i>Rosa rugosa</i> THUNB. (ハマナス)	40
	<i>Rubia cordifolia</i> L. Var. <i>Munjista</i> MIQ. (アカネ)	11
	<i>Rumex Japonicus</i> . (ギシギシ)	57
S.	<i>Salix nrpponicus</i> . (ヤナギ)	56
	<i>Sophora japonica</i> L. (エンジュ)	52
	<i>Symplocos crataegoides</i> MIQ. (サハフタギ)	63
T.	<i>Taxus cuspidata</i> SIEB. et ZUCC. (イチイ)	41
	<i>Ternstroemia japonica</i> (モッコク)	49
	<i>Thea sinensis</i> L. (チャ)	53
U.	<i>Umezu</i> . (ウメズ)	66

746-13
YAM.

This is a limited edition

Within 1000 No.



Published by
GETUMEIKAI

Kakio Kawasaki

Kanagawa

JAPAN

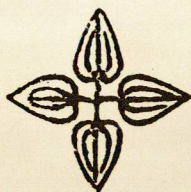


Indira Gandhi National
Centre for the Arts

MONOGRAPH
OF
PLANT-DYEING PECULIAR TO JAPAN

(NIPPON KUSAKIZOME-FU)

BY
AKIRA YAMAZAKI



GETSUMEI-KAI LTD.,

1961



Indira Gandhi National
Centre for the Arts

日本草木染譜 爐辺版 著者 山崎 斌
昭和三十七年四月八日出版・東京都 新
宿区坂町一五 月明会出版部発行・印刷
東京都豊島区駒込一ノ四七 ミツバ印刷
定価 貳千円也

印 検



限定
228



日本草木染譜